

第三節 女子教育の組織

中国における女子教育は、外国の宣教師が中国で条約により、布教権を獲得し、教会が設立した、教会学校の1つとして行われるようになった。

アヘン戦争以後、洋務期にかけては、中国では、女子教育の必要を認めていなかったが、19世紀の末までに、60校近くの女学校が設立されており、それは、それまで女子教育の機関を持たなかった中国に、大きな刺激となった。

ついで、変法期になると、梁啓超は、女子教育の必要を、次の4点におよそまとめている。^①

1、男子は、利を生む人であり、女子は、利を分つ人であって、生産労働を行わず、分配を受けるだけである。国を強くし、民を富ませるためには、女子に職業を与える必要があり、そのためには女子教育が先決である。

2、「才能のないのが婦人の徳である」という、従来の婦人観は、間違っている。婦人にも、古今の歴史、世界の地理を知って、視野を広げ、職業につくのを助けるような学問を施工せねばならない。

3、西洋では、児童教育の70パーセントは、母親によって行われているといわれており、児童教育のためには、母親教育、母親教育のためには、婦人教育が必要である。

4、胎教がある。西洋では、強兵をめざして、婦人に体操を教え、生れてくる児童の健康に留意している。国を強くし、民族を進化させるためには、男女を教育すること、特に婦人の学問を記すことから、はじめなければならない。

すなわち、梁啓超によれば、富国強兵のために、婦人の教育の必要が説かれている。

今、これらの歴史を踏まえて、変法期の女子教育を考える時、学会としては、女学会が、学堂としては、上海の中国女学堂が考えられるが、ここでは、事例研究として、女学堂について述べて行く。

第一項 中国女学堂

はじめに

本小論では、変法運動における学堂の役割の一例として、中国女学堂を取り上げる。^①

まず、中国女学堂の設置の意図、設置場所を明らかにし、ついで、その機能、参加者を明らかにし、最後に中国女学堂の意義について言及して行きたい。

1 中国女学堂の創立

まず、中国女学堂の設置の意図について考察して行く。

梁啓超の「倡設女学堂啓」によれば、

……泰西の女学は、都鄙駢わせて闡(み)ちており、医を業とし、蒙に課すのは、女師を専ら

としている。絶域の俗にあるといっても、はるかに先王の遺制のようであり、女学の功は、時に盛んである。外国から宣教師が来ると、中国が苦しみに溺れていくのを憫み、盛んに義学を建て、中国の児童の教育を求め、教会はいたる所、女塾と軌を接している。それは、他人がまさに中国人が苦しみに溺れているのを助けようとし、中国人は、自らに桎をしているようなものであり、……中国の羞である。^②

と述べており、外国では、女学が盛んであり女子の医者や、教育者がいる。また宣教師が中国に来ると教会と女塾を建てるというのである。梁啓超は、続けて、

甲午の創を受けて、(中国は)漸く学を興すのを知るようになり学校の議が、朝廷で騰まり、学校の所在地は都会に集まったが、中国の朝廷の大議は、一般の子女や良家の子女には及ばない。婦人に逮ばないのはつとめて逮ばないというのではなく未だ、この瑣屑の事をする暇がないのだろうか。また、扶陽抑陰の旧習は無いといっても、育才善種の遠図に昧いのである。

だから同志の士は、この弊に心を悼め、衆くの課程を糾合し、共に美挙をなさんとして上海に学校を建て、天下に倡えた。^③

と述べ、日清戦争以後、中国においても学校の議が起ったが、女学に迄は逮ばなかったことが知られる。また、同志が、これに心をいため上海女学堂を興す美挙をなしたことが知られる。梁啓超は、更に続けて、

しかし、二千年の頽風を振るい、二兆人が天命に訴えるのを拯う事は、力が孤微だといってもどうして已める事が出来ようか。男女は、平等の権利を持っており、米国が盛んとなったのは、女学が流布したからであり、日本が強くなり、国を興し、民を智からしめたのは、ここに始まらないのではない。三代女学の盛は、どうして米、日に遜する所があるだろうか。遺制は綿々として居り、流風は、まだうたかたとはなっていない。だから前代の遺規を復し、欧米の美制を採り、先聖の明訓にのっとり、保種の遠謀を急ぐならば、海内の魁傑がどうして游民、土番の害う者を憫することが無かるうか。人形のように苦しみに溺れ、どうして瞠目坐視することを忍ぶことができようか。また一つの援助の手もないということがあろうか。^④

と述べており、日米が、強国になったのも男女平等の権利にもとづき女学が盛んになったからだとしている。すなわち、女学を盛んにする背景に梁啓超の富国强兵策がうかがわれる。

最後に

種族を仁しむ、子孫を私するのは、其れも又仁である。人の楽しむべき所は、有事を為す事である。天下の興亡に、匹夫は責任を有しており、凡人にして、これを明らかにし、推してこれを広めるなら、これこそ吾が党にあるのだ。^⑤

と述べられており、仁を行い、天下を良くして行くのは、自分達凡人の責任であることを強調している。

ついで、「上海新設女学堂章程」の第1条立学の大意には、

1. 学堂を設けたのは、悉く吾が儒聖教に遵い、堂中では至聖先師の神位を供奉するためである。また宗旨を弁理して、三代の婦学の宏規を復活し、民智の張本が大いに開かれることを欲しているからである。必ず婦人に自ら有している権利を得させれば、風気が開け、名実相副うであろう。だから堂中では一切、すなわち創始の捐助からはじめて、提調、教習に及ぶまで皆婦人を用いて行わせるのである。^⑥

とあり、女学堂の開設の意図は、儒教に^{したが}い、婦人教育をし、民智を開くことにあることがわかる。また、婦人の自ら有している人格を認め、婦人を積極的に用いようとしている意欲が伺われる。

女学堂の設置年代、設置場所については、「女学堂章程附記」に

この学堂は、現に経元善知府がその成就をすでに10月26日に決めて上海の高冒廟桂墅里に労働者を集めていたが、期日を改訂して明年(1898)3月に落成し、初夏に開館する。^⑦

とあり、経元善が中心となり、上海に1898年初夏の開館をめざしていることが知られる。

2 中国女学堂の機能

章程により、中国女学堂の機能について見て行く。すなわち「辨事人員章程」「招選学生章程」「学規」「堂規」「学成出学規例」「捐例」「暫章」があるので、順次検討して行く。

「辨事人員章程」は5条よりなり、まず2条には、

2. 堂中に暫く教習4人を設ける。中文と西文各半分として皆華婦を延請してそれに司らせる。

大むね、学生20人毎に中文、西文の教習を各1人設ける。……^⑧

とあり、中文、西文の4人の華婦を教習とすることが知られる。ついで第3条には、

3. 堂中で提調(事務長)2人を設ける。中国人、外国婦人1名とし、みな学校に常駐して学生の出入を世話し、堂中の女僕人等を取り締まる。給料は適宜支給する。^⑨

とあり、中西2人の婦人の事務長を備うことが述べられている。第4条には、

4. 堂中に内董事12人を設け、皆かつて寄附をした婦人をこれに当てる。主に毎日学校に来て学科を考査し、提調の世話を助け、一切を取り締る。給料は出さない。^⑩

とあり、董事12人は、寄附をした事のある婦人から採用する事が知られる。第5条は、

5. 堂中に外董事12人を設ける。かつて寄附をした人の子、若しくは、夫、兄弟をこれとする。主に外にあって、寄附集めを提倡し、教習、提調を延聘し、学科を相談して定め、用度等の事を考慮する。給料は出さない。^⑪

とあり、外董事12人を選んで、寄附集めや、要員、用度の充足等を行おうとしたことが知られる。第6条には、

6. 堂中に司事2人を設け、男子をこれに当て、主に銀錢の出入と堂内外の瑣務を管理し、外董事により老成謹愼な者を公択する。会計のよくできる者を之となし、給料を給する。^⑫

とあり、男子2名とし、金銭を管理させている様子が知られる。

「招選学生章程」は5条より成り、学生に関する事項が取り扱われている。7条には、

7. 堂中には、しばらく、学生を40人招いて、その後、経費が充分になって来たら随時増広する。^⑬
とあり、最初学生定員は40名であったことが知られる。また、8、9条には、

8. 学生は年を限る。幼くとも8才以上であり、年長でも15才を過ぎないものとする。

9. 8才から11才に至る者では、必ず大略字を知っている者は、入学を許可する。12才から15才の者では必ず大略文法を知っている者で、簡単な手紙の書ける者は入学を許可する。定められた時期を待って、新聞紙上に広く招来して、信実を示す。^⑭

とあり、8才から15才の者を字や文法、手紙の書ける程度で撰別していたことや日報等に宣伝していたことがわかる。第10条には、

10. 纏足は、中国婦女の陋習である。……こしばかりは、相談して、志があれば、来学者は、すでに纏足しているとまだ纏足をしていないとかを論じないで、一律に収容する。数年を待ってから以後は初めて制限を画定して、凡そ纏足者は、皆入学を受け入れない。^⑮

とあり、やがては、纏足をしている者が入学できない事を明らかにしている。第11条には、

11. 立学の意は、平等を尊ぶことを義しいとしている。必ずしも流品を厳分しないと云っても、この学堂が設けられたのは、この学堂が風気の先端となるためであり、将来、ここから師範を自然と出すようにするためであるので、必ず、良家の才媛を撰ぶことによって国内の模範となることができる。だから奴婢、娼妓は、一切うけ入れない。^⑯

とあり、風気の先端とするため良家の子女のみを受け入れようとしており、開学後も実際に良家の子女が入学したのであった。^⑰

「学規」は5条よりなり、教科内容等が明らかにされている。第12条には、

12. 堂中の学科は、中文、西文は各半分とし、皆まず字を知り、ついで文法、ついで各専門の学問の啓蒙の初歩的な本を読み、最後に、史志、芸術、治法、性理の書を読む。^⑱

とあり、識字、文法、啓蒙書、専門書を読ませようとしていることが知られる。第13条には、

13. 堂中、専門の学3科を設ける。1に算学、2に医学、3に法学である。学生は人毎に必ず自分で1つの専門を深める。医学、法学を学習する者は、初歩の算理から必ず須べからく、通曉するようにする。^⑲

とあり、数学、医学、法学の3専門科目を学生に選択履習させていることがわかる。第14条には、

14. 3科の外に、別に師範科を設け、専ら童蒙を教育する方法を講求する。凡そ、自らこの科を深める者は、必ず各種の学問についての内容を略知するようにするので、3科目中で専門を占めることは必ずしも必要としない。^⑳

とあり、別に師範科が設置されていることが知られる。第15条には、

15. 紡織絵画等の事は、婦学に必需の所であるので、経費の拡充をまって、続々教員を招請して中外の芸事を教える。^㉑

とあり、紡織、絵画等も取り上げようとしていることが知られる。第16条には、

16. 堂中、毎月試験を1回行う。教員が出題し、甲、乙で評定する。季ごとに大試験を1回行い、試験用紙は専門家に送り評定し、順序をつけ、奨賞を設ける。……²²

とあり、各月1回の試験、各季1回の大試験を行うことが知られる。

「堂規」は4条よりなり、学堂の事務等が述べられている。第17条には、

17. 凡そ、学中の執事は、上は、教員、提調から下は、傭人まで、一切婦人を用い、厳に内外を別ける。堂門の中には永遠に男子が入ることを准^{まも}さない。……²³

とあり、堂中の執務はすべて婦人の手で行われることが知られる。第18条には、

18. 学堂は、初め租界に設けようとしたが地価が貴^{たか}く、容易でないので、相談して、上海の南桂墅里に設けた。これは、府城及び租界から遠いので、各人の宿舎を準備し、便宜をはかる。²⁴

とあり、学堂が南桂墅里に設けられたので宿舎を準備した事が知られる。第19条には、

19. 学生の学費は、欧米の書院章程を参照する。大むね徴収額を減らす。第1、第2、第3の3年とも毎月学生の徴収金額は銀一元とする。……若し寄附金に余裕ができ、費用が今まで通りならば、数堂を開いて教育を広めることもある。……²⁵

とあり、学生からの毎月の徴収金は、一元であることがわかる。第20条には、

20. 堂中、清潔、誠実な僕婦等を傭う。学生、来学者の一切の接待は、均しく周到にさせる。……²⁶

とあり、僕婦を傭うことが知られる。

「学成出学規例」は2条よりなり、学生の卒業後の進路等に触れている。まず第21条には、

21. 凡そ、学生で専門が、師範科や芸事等を学習して学の成った者に対しては、堂中から卒業証書を与え、将来、医者、法律家、教員等に任ぜられるべきである。²⁷

とあり、女学堂の卒業生は、医者、法律家、教員等に就職させたいということがわかる。第22条には、

22. ……今女学堂を創設し、各々が自ら有している権利を得させる。……公議したのは、凡そ真正の節婦の女であり、醴泉（うまい水の出る泉）や芝草（いわいだけ）ではないが、破格に培養すべきだということであった。だからつとめて師範一門を深め、貞母の賦与^とを秉^とる。よく自覚して、品行方正を願い、杜選を防ぐことをこいねがう。²⁸

とあり、女性の持っている権利を自覚させ、良妻賢母の育成を意図していたことが知られる。

「捐例」が3条あり、寄附の事が述べられている。²⁹第23条では、書籍を寄付した者について書かれており、第24条では、寄付金の額による寄附者に対する処遇が述べられている。例えば、50元以上寄附した者は、一生入堂して読書する事を准している。第25条では、どんな人からでも一元以上の寄附は受け取ることが述べられている。

最後に「暫書」が5条あり、当座の女学堂の運営の事が述べられている。第26条には、

26. 創立当初は、経費が充分ではないので相談して、まず上海に学堂を建てたが、後に再び議して、推广して各省の州県に普及させる。³¹⁾

とあり、女学堂を上海から各省の州県に普及させようとしていたことが知られる。第27条には、

27. 西欧教習は、相談して先ず、江西の康愛徳女士と湖北の石美玉女士を招聘する。³²⁾

と述べられており、先ず西文教習として康愛徳、石美玉の二人を招聘しようとしていたことが知られる。しかし、その後、この二人は招聘を拒否している。理由は二人はクリスチャンであり、この女学堂は儒教を基本としていたからであった。³³⁾第28条には、

28. 内外の董事は皆、同人の公挙に由らなければならない。西国の議員を挙げる例にならって投票を公挙の法とする。……³⁴⁾

と述べられており、董事などを投票によって決めようとしていた事が知られる。第29条には、

29. あらゆる寄附金は、暫くは不纏足会によって大収する。捐助してくれた諸芳名を『時務報』の末に列記する。……³⁵⁾

とあり、寄附金は、不纏足会で代收した事、捐助者名は、時務報末に載せたことが知られる。

第3において、女学堂の参加者として捐助者の氏名を挙げるが、ここに記されているように、いずれも『時務報』末から採取したものである。第30条には、

30. これは、試弁の草創の章程である。具さに大意を取ったものであり、堂中の詳細な学科や弁事章程等は、開弁をまって後に教習、提調と内外の董事の諸君によって細章が立てられる。³⁶⁾

とあり、まず試弁章程を作り、ついで細章が立てられることが知られる。第31条には、

31. 堂宇の落成後、至聖先師の神位を供奉する以外に、別に一院を開き、厨子を設け、女子のためにまつりの世話をする。……³⁷⁾

とあり、堂宇の落成後、至聖先師の神位だけでなく、女子のため一院を開くことが知られる。

以上、女学堂の機能について考察したが、次に参加者について見て行く。

3 中国女学堂の参加者

中国女学堂の参加者を検討するために、まず、参加者の表を作成して置く。³⁷⁾

学堂中の役割	氏 名	貫 籍	官 職 (又はそれに代わる資格等)
学堂設立者	経 元 善	浙 江	知府 (電報局長)
董 事	施 則 敬	浙 江	道 員
董 事	嚴 信 厚	浙 江	道 員
董 事	鄭 観 応	広 東	道 員
董 事	陳 濟 清		提 督
董 事	汪 康 年	浙 江	進 士
董 事	康 広 仁	広 東	生 員
董 事	梁 啓 超	広 東	挙 人
協 力 者	康 有 為	広 東	工部主事
協 力 者	張 睿	江 蘇	翰林院編修
協 力 者	康 同 璧	広 東	康有為の娘
協 力 者	曾 広 鈞	湖 南	翰林院編修
西文教習	Mrs. Richard	英 国	T. Richard 夫人
西文教習	Allen		

この他に教員としては、宣教師夫人、外交官夫人、宣教師達になった。また、学生は、最初16名が参加し、2学期になると20名に増加している。女学生達は、全員が良家の子女であったという。³⁸⁾

以上をもとに参加者について分析を加えて行きたい。まず、設立者の経元善は知府となっているが、これは捐官によるものであり、実際は上海の電報局長であり、上海の商人であった。この外、彼の仲間の鄭観応等の上海商人層と、いわゆる康梁系といわれる、変法中間派の人達が主であった。³⁹⁾

表で参加者の氏名の判明している者、14名の階層分析を明らかにすれば、提督 (従1品) 1名、道員 (正4品) 3名、知府 (正4品) 1名、主事 (正6品) 1名、翰林院編修 (正7品) 1名、中国婦人1名、宣教師夫人1名、外国婦人1名である。

すなわち提督を最高位にして、道員が数として1番多く、中下級の官僚によって担われていたことが知られる。もっとも前述もしたように、ここに見える道員達は、名目は、道員であっても、実際の商人層であった。

つぎに参加者の出身地について見れば、以下の通りである。広東5名、浙江4名、江蘇、江西、湖北、英国、不明各1名である。すなわち康梁系を中心とする広東と、浙江身の上海商人層にかたよりが見られる。

つぎに寄附者について考察して行く。考察に当たってその表を作成して置く。⁴⁰⁾

氏名（それに代わる資格等）	関係者の官職（それに代る資格等）	関係者の貫籍	本人の貫籍
譚嗣同の妻李恭人	候補知府	湖南	人鳳陽
陳三立の妻俞恭人	主事	江西	人夫太無田の謝雲龍
薛華培の妻宋一品夫人	道員	四川	人夫太無田の謝雲龍
蔣德鈞の妻毛淑人	知府	湖南	人夫太無田の謝雲龍
狄葆賢の母周宜人	知府	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
周宜人率媳汪氏	知府	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
志銳の妻李夫人	參贊大臣	滿州	人夫太無田の謝雲龍
文廷式の妻陳淑人	內閣學士	江西	人夫太無田の謝雲龍
文煒之の妻冒夫人	知府	江西	人夫太無田の謝雲龍
文廷楷の妻徐宜人	中書	江西	人夫太無田の謝雲龍
徐恭宏の妻蔡恭人	員外郎	江西	人夫太無田の謝雲龍
趙元益の妻孫宜人	知府	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
張煥綸の妻江宜人	同知	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
經元善の妻魏淑人	知府	浙江	人夫太無田の謝雲龍
魏淑人率媳葛氏	知府	浙江	人夫太無田の謝雲龍
梁啓超の母吳宜人	舉人	廣東	人夫太無田の謝雲龍
吳宜人率媳李氏	舉人	廣東	人夫太無田の謝雲龍
康有為の母勞太恭人	主事	廣東	人夫太無田の謝雲龍
汪康年の母閔太宜人	進士	浙江	人夫太無田の謝雲龍
閔太宜人の率媳王氏	進士	浙江	人夫太無田の謝雲龍
麦孟華の妻盧媳人	舉人	廣東	人夫太無田の謝雲龍
趙鳳冒の妻洪宜人	知府	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
何嗣焜の妻邵淑人	知府	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
盛昌頤の妻宗夫人	道員	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
陳李同の妻賴一品夫人	參贊	福建	人夫太無田の謝雲龍
曾広鈞の妻趙宜人	翰林院編修	湖南	人夫太無田の謝雲龍
張鏡濂の妻陸宜人	知府	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
吳保初の女吳敬恪	主事	江西	人夫太無田の謝雲龍
經元善の妾朱氏	知府	浙江	人夫太無田の謝雲龍
吳保初の母汪一品太夫人	主事	江西	人夫太無田の謝雲龍
嚴攸慶の妻曹宜人	州同	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
周廷弼の妻費夫人	運同	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
吳熙麟の妻一品夫人	知州	安徽	人夫太無田の謝雲龍
顧壽喬の妾周氏	知府	安徽	人夫太無田の謝雲龍
張謇の妻徐恭人	翰林院修撰	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
翁熙孫の母蔡太夫人	知府	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
沈毓桂の妾某氏	同知	江蘇	人夫太無田の謝雲龍
胡琪の母王太宜人	知府	安徽	人夫太無田の謝雲龍
王太宜人の率媳曾氏	知府	安徽	人夫太無田の謝雲龍

何恭寿の妻沈淑人	知	府	浙	江	
“ 陳淑人	知	府	浙	江	
塩袁梅の故母姚太夫人	大	使	浙	江	
姚太夫人の長媳経氏	大	使	浙	江	
王松森の妻高夫人	道	員	江	蘇	
鍾天緯の妻李宜人	通	判	甘	肅	
汪炳の母貢夫人	知	県	安	徽	
貢夫人の率媳朱氏	知	県	安	徽	
屠成杰の媳呉氏	同	知	安	徽	
王維泰の妻甘安人	州	判	江	蘇	
桂葵の妻劉儒人	訓	導	福	建	
施則敬の妻畢夫人	道	員	浙	江	
鄭観応の葉夫人	道	員	広	東	
嚴信厚の母費夫人	道	員	浙	江	
嚴信厚の妾王氏	道	員	浙	江	
沈敦知の母張太夫人	道	員			
沈敦元の妻王安人	知	県			
“ 尹安人	知	県			
沈敦和の妻楽恭人	道	員			
“ 章恭人	道	員			
鄭清瀛の妻原宜人	知	県	福	建	
伊立勲の妻朱宜人	県	丞	福	建	
伊立勲の妾嚴氏	県	丞	福	建	
朱徳坤の女	生	員	江	蘇	
凌鳳国の母徐宜人	訓	導	浙	江	
何心川の妻葛夫人	参	将			
周葛鵬の妻袁宜人	県	丞	浙	江	
麦拉の妹	中国電報局洋総管		デンマーク	デンマーク	
李圭の妻経夫人	知	府	江	蘇	
李圭の三女季玉	知	府	江	蘇	
姚張弼の妻李宜人	県	丞	広	東	
姚張弼の女応禄	県	丞	広	東	
朱宝の妻金淑人	知	府	江	蘇	
唐允湛の妻邵儒人	分	県	広	東	
李圭の女宝珠	知	府	江	蘇	
銭銘銓の母王淑人	光	禄			江 蘇
銭銘銓の妻周安人	光	禄			江 蘇
曹馴之の妻魏恭人	翰林院編修	修	広	西	
龍沢厚の母秦太宜人	翰林院編修	修	広	西	
秦太宜人の媳廖元華	翰林院編修	修	広	西	

湯鳳羣（女子）		広	東		
羅宏錯の母劉宜人	举 人	広	西		
劉宜人率媳朱氏	举 人	広	西		
黄遵憲の妻一品命婦葉氏	按 察 使	広	東		
江標の母華恭人	翰 林 院 編 修	江	蘇		
華恭人の率媳汪氏	翰 林 院 編 修	江	蘇	浙 湖	江 南
朱思緘の母陳夫人	道 員	湖	南	湖	南
夏寅官の母陳太宜人	翰 林 院 編 修	湖	南		
陳太宜人の率媳	翰 林 院 編 修	湖	南		
陶仁榮の妻薛淑真	戸 部 主 事	浙	江		
余昌宇の妾宋氏	道 員	江	蘇		
余昌宇の妾陳氏	道 員	江	蘇		
李宝嘉の母吳宜人	生 員	江	蘇		
姚文餘の妻金氏	生 員	浙	江	浙	江
王慶康の妻文儒人	举 人	浙	江		
查眠琴の妻翟氏		直	隸		
陳步蟾の母劉太夫人	評 事	広	東		
陳步蟾の母沈太夫人	評 事	広	東		
劉・沈太夫人の率媳李氏	評 事	広	東		
張嘉瑞の母誥封宜人高氏	補用知県、四川候補県丞	江	蘇		
高氏率媳甘氏	補用知県、四川候補県丞	江	蘇	四 川	
沈瑜慶の妻誥封夫人鄭氏	江蘇特用道				
輪鄭綸の妻誥封宜人黃氏	管帶虎威兵			福 建	
樊棻の妻誥封恭人張氏	江蘇補用同知	直	隸		
林鐘鯨の妻誥封夫人童氏	三品銜分省試用道				
陳爛の妻誥封淑人何氏	三品銜安徽補用知府	湖	南		
華鴻模の妻朱恭人	知府銜内閣中書	江	蘇		
朱恭人命媳章儒人	知府銜内閣中書	江	蘇		
李鼎星の母誥封儒人龔氏	揀選知県、大挑二等即選教諭	広	西		
龔氏率媳龍氏	揀選知県、大挑二等即選教諭	広	西		
何立標の妻陶儒人	經歷銜	浙	江		
朱佩珍の妻	提举銜、升用知県	浙	江		
曹吉福の妻汪宜人	五品頂戴、候選県丞	江	蘇		
劉光宝の妻王儒人	監学正銜、乙亥科举人	狭	西		
康納夫人					

以上が寄附者の表であり、氏名の判明する者が114名であることがわかる。

ついで、同表から関係者の官職（又はそれに代る資格等）の表を作成する。⑪

官	職	品 秩	人数	官	職	品 秩	人数
内 閣	学 士	従 2 品	1	参 贊	大 臣	従 2 品	2
按 察	使	従 2 品	1	参	将	正 3 品	1
知 府		正 4 品	18	道 員		正 4 品	15
運 同		従 4 品	1	同 知		正 5 品	4
員 外 郎		正 5 品	1	知 州		従 5 品	1
通 判		正 6 品	1	主 事		正 6 品	5
知 県		正 6 品	15	翰 林 院 修 撰		従 6 品	1
光 祿 寺 署 正		従 6 品	2	評 事		正 7 品	3
翰 林 院 編 修		正 7 品	8	内 閣 中 書		従 7 品	3
州 判		従 7 品	1	県 丞		正 8 品	5
訓 導		従 8 品	2	大 使		従 9 品	2
中国電報局洋総管			1	分 県			1
進 士			2	菅 帶 虎 威 兵			1
举 人			6	生 員			3

これから見れば、内閣学士を最高位とし、正 4 品の知府、道員、正 6 品の知県、正 7 品の翰林院編修にかたよりが見られ、中下級の官僚の関係者が、主に女学堂に寄付していることがわかる。また、この中には前述の唐梁系の関係者、経元善等上海商人層の関係者が見られる。

つぎに、関係者の出身地の表を作成して考察して行く。

省 名	人数	省 名	人数	省 名	人数	省 名	人数
江 蘇	29	浙 江	19	広 東	13	広 西	9
安 徽	7	江 西	5	福 建	5	湖 南	8
直 隸	2	満 州	1	四 川	1	甘 肅	1
陝 西	1	デンマーク	1				

これから見れば、江蘇が 1 番多く、ついで浙江、広東、広西にかたよりが見られる。すなわち、上海に女学堂が設立されたので、江蘇が多いのは当然であるが、経元善の出身地浙江、康梁派の出身地広東にもかたよりが見られる。これからも上海の商人層と康梁系の連繋が伺われ、興味深い。また、寄附者自身の出身地は、江蘇 2、浙江 2、湖南、福建、四川、デンマーク 1 である。これも、前述の表と相関関係にある。

4 中国女学堂の意義

中国女学堂の意義について考えて行くが、まず、女子の人材の育成が第一義の事として考えられる。

すなわち当時、中国においては、女性の教育については考えられていなかったが、女学堂がはじめて女性の人格を認め、教育に当たった。そして、すでに章程の21、22条に見たように医者、法律家、教師、良妻賢母の養成が意図されたのであった。

また、女性解放の側面も考えられる。すなわち、入学者には、纏足を禁止し、女性を自由にし、中国の伝統的な悪習を絶とうとした。

さらに、女性の自立をうながすものとして教員、事務員、堂内董事等を女性のみとしたことが考えられる。女性の人格の認められない当時において、女性の人格を認め、その教育を女性の手にゆだねた意義は高いと云わねばならないであろう。

しかし、限界もあった。例えば、儒教に遵うのをその立学の大意に入れており、これに対しては、前述したように招聘された康愛徳、石美玉女士がクリスチャンの立場からそれを拒否している。

この限界は、当時、清朝政府が女子教育を認めなかった段階で、女学堂を設立しようとするのには、己むを得なかった面でもあったと考えられる。

おわりに

最後に、いままでのまとめと、今後の展望をして置く。

まず、女学堂の設置は1898年6月であり、その意図は、儒教を遵守する女子教育を行い、富国強兵策の一環としてしようとしていることが知られる。

ついで、女学堂の機能としては、教習、提調、董事（教師、事務長、役員）も主なものは女性を用い、男子は堂内に入れないことになっていた。また、学生は最初定員40名であり、年令としては、8才以上15才までであり、纏足をしない良家の子女を年令に応じた学力により入学させようとしていたことが知られる。

教科内容としては、識字、文法、啓蒙書と史学、芸術、治法、性理等の専門書を読ませていたことが知られる。

専門の学科としては、算学、医学、法学の3学科と師範科の4つが置かれた。また婦人に必要な紡織、絵画等も教授された。

試験は毎月1日と季節毎に1回行われ、順序をつけ、奨賞しようとした。

学堂は、上海の南桂墅里に設けられたので寄宿舎が準備され、僕婦が備われ、学費は毎月、銀一元であった。

卒業生には卒業証書を友え、女権を自覚させ、医者、法律家、教員や、良妻賢母の育成を意図した。

寄附は、一元以上受け取り、『時務報』の巻末に載せ、学堂も経費の拡充にともない、各省の州県に普及させることが意図され、役員は皆投票によって決められた。章程は、最初、試弁章程が作られ、開弁を待って詳細な弁事章程が作られることになっていた。また堂宇の落成後、至聖先師の神位の供奉と女子のために一院が開かれることになっていた。

つぎに参加者について見て行けば、参加者としては、道員以下の康梁派の中下級の官僚と捐官の経元善を中心とする上海商人層が多く、康梁系の広東と経元善等が出た浙江にかたよりが見られた。

寄附者について見て行けば、寄附者は女性であり、その完全な氏名も残されていないが、関係者の官職を見れば、道員、知府、知県、翰林院編修の中下級官僚にかたよりが見られ、この中には康梁系と上海商人層が見られる。また出身地は、女学堂の設立された、江蘇と上海商人層の出身地浙江、康梁系の広東にかたよりが見られ、参加者と同じ傾向が見られる。

最後に女学堂の意義としては、女性の権利を自覚させ、医師、法律家、教師、良妻賢母の育成を図った所にあり、限界としては、儒教にしばられていた。

以上が女学堂のあらましであるが、戊戌政変により、女学堂が僅か二年足らずで閉鎖の己むなきに至ったとしても、その存在意義は決して小さくないといわなければならないだろう。

第四節 児童教育と教育学の組織

中国における児童教育は、第一の概観の所で見たように、庶民の間では、義塾、村塾などの私塾において行われた。また、読書人の間では、家庭教師なども備われた。

アヘン戦争以後、外国の宣教師の活動の一つとして、教育活動が行われるようになった。それは、教会学校と称せられ、教会が中心となって、学校教育を行うものであった。

教会学校の最初は、ロバート・モリソンのマラッカの英華学堂であるが、それ以後、初等教育から、高等教育に至る諸学堂が見られるようになった。

これらの学堂では、従来の科举合格につながる私塾とは、性格を異にする教育が行われた。すなわち、西欧のキリスト教、人文、社会、自然科学を中心とする教育であった。

児童教育、教育学においても、同じ性格を持った教育が行われたが、ここでの特徴は、前節でも見られたように、児童教育が母親によって、担われていたことから、児童教育と母親教育が同時に行われたことであった。

今、変法期の児童教育と教育学の展開を具体的に見るならば、学会としては、蒙学公会、報刊としては、蒙学报、演義報、求我報があり、学堂としては、遜業小学堂、各地に設立された小学堂がある。

ここでは、事例研究として、蒙学公会、蒙学报を取り上げる。

第一項 蒙学公会

はじめに

変法運動における学会の役割の事例研究の一つとして本節においては、蒙学公会の場合を取り上げる。蒙学公会は、児童等の教育者の養成を通して人材を養成する根拠とし、変法の実施に役立てようとするものであり、教育者の養成を通して、幼児、児童、男子、女子の教育上の効果をも志向している。

そこで、まず蒙学公会設置の意図と目的、ついで、蒙学公会の機能、参加者、最後に蒙学公会の意義について順次述べて行きたい。

1、蒙学公会の設置

蒙学公会^①の設置の意図と目的、設置年代、設置場所についてこれから述べて行きたい。まず蒙学公会の設立の意図と目的であるが、蒙学公会公啓の立会本旨によれば、

児童を教育するものは、天下人材の根底である。根本が正しくなければ、萌芽はどうして成長することができようか。……

私共は、時運の困難を痛憤しており、善良な種子が、播き棄てられ、落ちて、人に蹂躪されているのではないかと恐れ、聖人の心を仰ぎ体して、蒙学公会を設立し、童、幼、男女に均しく教化を沾おそうとするのを主旨としたい。^②

とあり、教育者の養成を通して、幼児、児童、男、女の教育に利するために設立されたことが知られる。

つぎに設置年代であるが、蒙学公会の会報である『蒙学会報』の簡章のあとに、光緒23年同啓と見え、^③蒙学公会が、光緒23年に設立されたことが知られる。また「蒙学公会公啓」ならびに「蒙学会報簡章」を載せた雑誌は、『時務報』^④の第42冊であり、これが光緒23年9月21日に発行されていることからこれ以前もしくは、同時に、蒙学公会が設立されたと考えられる。

また設置場所であるが、梁啓超の『戊戌政変記』^⑤には上海と見えているので、上海に設立されたと考えてまず間違いにないと思われる。

以上、蒙学公会の設置について考察して来たが、次節においては、蒙学公会公啓によりその機能について見て行きたい。

2、蒙学公会の機能

蒙学公会の機能について、蒙学公会公啓には、

立会の本質は、大むね4に分けられる。第一には、会である。天下の心志を連ならせ、群に帰せしめ、相ともに聖教を宣明にし、錮蔽を開通させる。第二には、新聞である。法を立て、説を広め、天下の耳目を新たにして児童の教育の模範とする。第三には、図書である。図器、歌誦、論説を作り、児童の誦習に便ならしめ、その知恵を深める。第四には学校である。師範を端し、蒙養を正して、人材を育成し、必ず充分に備えるべきである。今本会の同志は、時習の極弊に対して、すみやかに、広く利用したいと思うので公議して、先ず書報を起点として、集会や学校を締結点とする。^⑥

とあり、集会、新聞、図書、学校について述べられており、その中でも書報を起点としようとしていることが知られる。

以下、これらの四つの問題と、集会者の登録、会友の役割分担、資金などについて、公啓に従って、考察して行く。

集会については、

本会の志は集益にある。凡そ同志と會は、努めて、本会の立てた所の各章、書報、論説、歌訣、^⑦各種の義例を求め、或いは、専ら章程を擬し、^⑧速ばない所を教え合い、或いは、錯誤を糾正し、精しく手紙で知らせた者は、均しく報尾に謹しんで採録し、編んで博く議し、以て手本に資せしめようとするものである。^⑧

とあり、この会の目的は、集益であり、皆で切磋琢磨して會を盛んにして行こうとしている様子がうかがわれる。

つぎに書報の『蒙学报』^⑨であるが、これについては、公啓によれば、

本会は、はじめにまず書報の仕事をして後に學堂を立てる。書報は、同志が費用を集めおさめ、館を開き、印刷されたものを訳す。^⑩

とあり、まず書報の発行を最初の仕事としたことが知られる。

また蒙学报簡章第一条、第二条には、

1、本報は、二つの大綱に分け、一つは、人の母となるための手本としての訓育法であり、一つは教師が教えるための方法である。^⑪……

1、本報は、啓蒙を主としており、婦学や師教は、蒙を正す源である。今中国では、婦学が講ぜられず、師学が善くない。だからもっぱら浅明通便の法をとり、図説、歌訣を第一の要義としている。^⑫……

と述べられており、当時全く顧みられなかった婦人の教育と教師の教育を重要視して、そのために蒙学报が発行されたているのが知られる。

図書については、

書物では、訳と才能をあつめ、海内通人の著作や、図器、書論で大変蒙学者に便利なものがあるならば、つとめて本会に手紙で知らせしてほしい。或いは、全部発行し、その一端を採録して教益に役立てたい。^⑬

と見え、教育の一環として大切な書物の発行も計画されていることが知られる。

學堂については、

本会は、……将来は、學校を設立し、それを二つの部門に分けることを考えている。その一つは、兒童教育学であり、他の一つは、幼兒保育学であり、その上に拡充するならば、中等専門の學校を設立することを考えている。願うことは、人材が毎日多く出、上は、国用に備うべきであり、下は、本業を失わせないようにし、これに副えるように期し、つとめて、困難が出ないようにし、小さな業を集め、まさに衆學に資そうとするのである。^⑭

とあり、兒童教育学、幼兒保育学をはじめとしてできれば、中等専門學校を設立して人材を養成し

ようとしている様子がうかがわれる。

つぎに会員の登録については、

凡そ会に参加する者は、姓名と住所を示し、時を定めて蒙学公報に載せ、それを会友題名録と名づけている。^⑮

とあり、登録の手続きがわかる。会友の種類については、

会に参加している同志は、三種類に分けている。その第一は議事の会友であり、章を定め、書物を編する事に属している。第二は捐助の会友であり、資金を集めたり、資金を塾（おさ）め、書器を購入したり贈ったりすることに属している。第三には議事と捐助を兼ねた会友であり、書章と集塾のことは聴いて自ら選択し、事に任ずる。^⑯

とあり、会友には、議事会友、捐助会友、議事と援助を兼ねた会友があり、それぞれ、役割分担をしていることが知られる。

最後に資金関係について見るならば、前述の捐助会友が資金を集めたり、調達する以外に同じく公啓には、

仕事を始めて、資金の集りが充分でない時には、再び、同志と章程を訂正して広く募集し、……皆が資金を、集塾することを論じ、余った資金で、期に分けて返還することを計画している。^⑰

とあり、資金が足りない場合、章程を変更して資金を集めようとしている様子が知られる。以上蒙学公会の機能について考察したが、つぎに、参加者について明らかにしていきたい。

3、蒙学公会の参加者

まず、史料により参加者表を作成して置く。

氏 名	出 身	官職 (それに代る資格等)	会中の役割
葉 瀚	浙 江	生 員	
曾 広 銓	湖 南	知 府	
汪 康 年	浙 江	進 士	
汪 鐘 霖	江 蘇		

表によれば、参加者で姓名の判明しているのは、葉瀚、曾広銓、汪康年、汪鐘霖であり、そのうち葉瀚は生員であり、『時務報』に関係し、汪康年は、33才で会試に合格し進士となり、梁啓超と共に『時務報』の編集に当って積極的に变法論を展開している。^⑱ 曾広銓は、不纏足会、時務報に関係し知府であった。汪鐘霖は、保国会、不纏足会にも参加しているが、階層は不明である。

以上をまとめれば、知府1名（正5品）、進士1名（従7品）、未流1名、不詳1名でいずれも中下級の官僚層であったことが知られる。その出身地について見れば、浙江省2人、湖南省1人、江蘇省1人となっている。

以上参加者の階層構成、出身地について見たが、次に蒙学公会の意義について考察して行きたい。

4、蒙学公会の意義

蒙学公会についてその設置と機能、参加者について見て来たが、蒙学公会の学会中における意義は、何と云っても西学的（啓蒙的）な役割を果たしたことであろう。

すなわち、すでに見たように、蒙学報簡章によれば、同報は、啓蒙を主としており、婦学や、師教は、蒙を正す源であると述べられており、ここに、蒙学公会の意義が西学的（啓蒙的）役割にあったことが知られる。

さらに蒙学会の意義は、単に一般的な啓蒙だけでなく、当時、うとんぜられていた女子教育、とくに母親教育に力を入れていることに注目しなければならないと思われる。ここに変法運動が女子教育、母親教育、ひいては、女性の解放に積極的に取り組もうとしていたことが知られる。

また、蒙学公会の啓蒙的な役割のもう一つの側面は、師教であり、人材を育成する根元である教師の教育にあったことが知られる。その意味では蒙学公会は、西学的学会の一つである教育学の学会であるといえる。

さらにこれを通してすでに見た様に、幼児、児童、男子、女子の教育のために、この会が設置されており、当時、形式的となり、軽んじられていた教育を、充実したものになろうとする意欲がうかがわれる。

すなわち、当時、見過しにされ、顧みられなかった教育の問題をとりあげた所に蒙学公会の意義があると思われる。

おわりに

最後に、いままで考察して来たことをまとめ、その後の展望について触れて置きたい。すでに見て来たように、蒙学公会は、教育者養成を意図して光緒23年に上海に設立された西学的な学会であった。この学会の機能は、まず第一に集会であり、益を集め、皆で切磋琢磨して会を盛んにしていこうとしている。第二に蒙学報の発行であり、女性（母親）と教師の教育を目的としている。第三に、教育の一環としての有益な図書の発行であり第四に、児童教育学、幼児保育学を含む学校や中等専門学校の設立による人材の養成であった。第五に、入会の登録手続きについてであり、第六に、議事会友、捐助会友、議事兼捐助会友を含む三種類の会友についてであり、第七に資金の調達を考えていることである。

つぎに参加者であるが、中下級の官僚によって担われ、その出身地については、浙江にかたよりが見られた。この学会の意義は、すでに見たように、女性（母親）教師の教育により人材養成の根拠を確立しようとしたことである。

最後に、蒙学公会の運動は、戊戌政変により、一時中断されたが、清末の学校制度の改革の中に生かされることとなる。

第二項 蒙 学 報

はじめに

本小論においては、変法運動における報刊の役割の一事例として、啓蒙的な役割を果たしたと思われる『蒙学报』について取り上げる。

まず、蒙学报の発行の経緯を明らかにし、ついで、その組織・内容・参加者を究め、最後に同報の意義等についても考察して行きたい。

1 『蒙学报』の発行

『蒙学报』は蒙学会の機関誌として発行されたが、^①その発行の意図は、「蒙学报演義報合叙」によれば、

…子供を悦び、愚民を導く程、善いことはない。…だから小学を教え、愚民を教えることは、実に今日中国を救う第1義となす。^②

といわれており、子供、庶民の教育の大切さを説いている。

また、蒙学会報簡章（以下簡章と略称する）によれば、その前文に

本会に学报を設けたのは、専ら幼童の教育の為である。^③

と云われており、幼童の教育のために蒙学会に学报が作られたことが知られる。

ついで、簡章の刊報凡例の第1条には、

本報は、両大綱に分ける。一つは、人の母となるための手本としての訓育法であり、一つは教師が教えるための通便の法である。^④

とあり、幼児・児童の教育に当る母親、教師のために発行しようとしていることが知られる。

第2条には、

本報は、啓蒙を主としており、婦学や師教は、蒙を正す源である。今中国では、婦学が講ぜられず、師学が善くない。だからもっぱら浅明通便の法を取り、図説、歌訣を第一の要義としている。…その図説の問答には、白話を用い、歌訣の略論には、文法を用いる。^⑤

と見え、当時全く顧みられなかった女性の教育と教師の教育を重要視し、『蒙学报』を発行し、図説、歌訣によって教育しようとしていることが知られる。

第3条には、

本報の書く所の論説は、均しく浅易、平実であり、^⑥……

とあり、ここでも平易な論説を書くことが意図されている。

つぎに『蒙学报』の名称について考察して置く。日本に現存する『蒙学报』は、簡見の限り、9、10、11冊あるが、その表紙にはいずれも『蒙学报』^⑦と書かれている。しかし、目次^⑧と中の柱^⑨には各冊とも各葉ごとに、『蒙学書報』と書かれている。また、中国近代史料叢刊の戊戌変法第4冊に

は、『蒙学報』⑩『蒙学会報』⑪の語が見える。そこで、本小論では、表紙ならびに戊戌変法の呼称の一つに従って『蒙学報』とした。なお湯志鈞氏も前述の三著で『蒙学報』といわれている。

『蒙学報』の表紙には英語のタイトルとしては、THE CHILDREN EDUCATOR^⑫になっている。

また、『蒙学報』の発行日について考えれば、光緒23年9月21日の『時務報』に掲載されている『蒙学報』の刊報凡例第8条には、来月すなわち10月より7日に一度発行するといわれている。^⑬

しかし、実際に発行されたのは、『蒙学報』第9冊が、光緒24年2月初1日、^⑭第10冊が同年同月初8日、^⑮第11冊が同年同月15日^⑯となっており、7日に一度発行されているが、逆算すると第1冊は、実際には光緒23年12月15日頃発行されたということになるので、おそらく刊報凡例で意図した発行日より実際の発行日がおそくなったと考えてまず間違いないであろう。

最後に発行場所であるが、『蒙学報』の表紙には、「本館設在上海三馬路望平街口朝宗坊」^⑰と書かれているので、上海三馬路望平街口朝宗坊であると考えられる。

2 『蒙学報』の組織

『蒙学報』では、刊報凡例8則と報刊弁事凡例6則があったが、現存するのは、刊報凡例8則である。^⑱今、刊報凡例により、その組織を見て行く。

第4条には、

本報は、東西各国の書報を翻訳し、各家の論著を採り、連続して翻訳編集し、他日装訂して冊子とする。……^⑲

とあり、各国の書報を翻訳して冊子とすることが知られる。

第5条では、

本報が訳した所の東西各国の書報は、現にすでに購入依頼の手紙を出している。^⑳

とあり、翻訳した書報の購入依頼の手紙を出していることがわかる。これに関連して、『蒙学報』の最後の公告の所にも蒙学報刊の販売している書名と価格が見られる。^㉑

第6条には、

本報の後には、専門家及び同志の議論と会友題名を附列しており、本館弁事人の姓名及び本報を代派発する諸人の姓名、住居も再び印列してある。^㉒

とあり、『蒙学報』の組織としては、会友と本館弁事人と代理販売人がいたことが知られる。

第7条には、

本報のあとに公告を並べ、本館にあっては、金銭の帳簿面を明らかにし、報章、文書類の専略を知らせ、さらに各例の改正に及んでいる。その外にも、もし事理に明らかな人があって、書器、図論を創造し、本館によって販売し、児童教育者に便ならしめようとする者は、手紙をくれば、公告に並べ入れることができる。その他の事は公告にはのせない。^㉓

とあり、『蒙学報』の最後に経理、報章、凡例の改正などについての公告を載せていることが知ら

れる。

つぎに報末に出ている蒙学報の販売取次所は以下の通りである。²⁴

すなわち、上海（2ヶ所）、京城（3ヶ所）、天津（4ヶ所）、保定、烟台、湖北、漢口、湖南、江西（2ヶ所）、九江、宜昌（2ヶ所）、安慶（4ヶ所）、南京（2ヶ所）、淮安（3ヶ所）、常州（3ヶ所）、蘇州（2ヶ所）、常熟、松江、杭州（5ヶ所）、寧波（3ヶ所）、台州、福州（2ヶ所）、広東（3ヶ所）、潮州（2ヶ所）、香港（2ヶ所）、汕頭の全国26の地域に54ヶ所の蒙学報販売取次所が設けられ、その中で報館関係が蒙学報館、時務報館、漢記書局、渝報館、時務報分局（南京）、無錫售申報処、温州時務局、広東知新書局、広東時務書局の9、役所関係が電報局3、湖南鉅務總局、官書局、閩海関科房の6、書店関係が寿州文徳堂書坊、觀前文瑞樓書房、聖書樓、聚珍書樓、文裕堂書房の5、学校関係が龍城書院、秀南橋陳塾、求是書院、瑞安学計館の4、会社、商店、会館関係が7、個人が17（そのうち役所など勤務先に関係するもの8）である。

これから見ると、報館、役所、書店、学校、個人宅などにかたよりがあり、可成り、社会的に広がりがあったことが知られる。

また、資金面では、報費と寄附によっていたことが報末の寄附者氏名と公告によって知られる。なお報費は、一冊4角であり、年に44冊出され、4元であった。²⁵

3 『蒙学報』の内容

すでに述べたように現存の『蒙学報』は、9、10、11冊の3冊であるが、今その内容を検討していく。各冊ともその内容の構成は大きく3つに別けられる。すなわち5歳から8歳用の上編と9歳から13歳用の下編と報末の付録である。

上編も下編も3冊ともそれぞれ、文学類、数学類、智学類、史事類、輿地類に分けられているので、²⁶今この順序で概観して行く。

上編の文学類²⁷では、識字法、中文読本書、文学初津の題がつけられている。識字法では、身体や動植物や道具類の字を文語と言語の説明で学習するようになっている。中文読本では、その一部が比較的詳しく解説されている。文学初津では、内容的には文法的なことが説明されている。

つぎに上編の数学論²⁸では、加減乗除、暗算、筆算などが載せられている。

智学編²⁹では、物類積、中文修身書、西文比類学がある。物類積では、鉅石類が紹介されている。中文修身書では、幼慧、友愛、識見などが、文語と口語で説明されている。

西文比類学では、家庭における育児、教育学が説かれている。

史事類³⁰には、中国史の歴代事類歌、歴代帝王種姓世系表が載せられている。輿地類³¹では、中国直隸順天府庁州県方名歌、盛京府庁州県方名歌、山東府庁州県方名歌が挙げられている。

下編に移ると、まず文学類³²では、啓蒙字書、中文積例、西文教授術がある。啓蒙字書には、各字の発音と積義が載せられている。

中文積例では、文法が説明されている。西文教授術は、教授法、学校の事が述べられている。

数学類³³は、呉県の葉燾元によって書かれ、分母分子について述べられている。

智学類³⁴では事類積、児童画学が取り上げられている。事類積には、農学、動物学、植物学、物理学の事が述べられている。

児童画学は、西朝から翻訳されたものであり、曲線法や動植物、地図の書き方等が載せられている。

史学類³⁵では、中史略論、中外通史演義叙例、古代通史演義が書かれており、葉瀚の筆になり、秦代史が多く語られているが、個別に見て行くことにする。

中史略論は第9冊に載せられたものであり、秦の始皇帝が儒術の方士を信用して太平の業、長生を致す薬を欲したことを論じたものである。³⁶

中外通史演義叙例は、第10冊に載せられたものであり、葉瀚が友人から中史略論が初学者にはむずかしいといわれたので歴史の大事を口語の演義形式で書こうとしたものである。³⁷

中国古代通史演義は、民乱が激しくなり、秦の胡亥が国を亡ぼした様子が描かれている。³⁸

輿地類³⁹は、亞洲山勢説略、亞洲水流説略、西文輿地啓蒙、歐羅巴洲全図からなっている。亞洲山勢説略は葉瀚の筆になり、アジアの山脈のことが述べられており、亞洲水流説略はアジアの海や河川、湖について述べられている。⁴⁰

輿地啓蒙では、世界の宗教とヨーロッパの諸国と河川、海が紹介されている。最後にヨーロッパ全図が載せられている。

最後に報末の附録には、会友題名、寄附者名、販売取次所、本の広告、蒙学報館公告、他報館公告等が載せられていた。⁴¹

なおここに見える他報館は時務報館が1回である。

以上が、蒙学報の内容のあらましであるが、児童を教育するに必要な事柄を平易に興味深く述べようとしていることが知られる。

4 蒙学報の参加者

蒙学報の参加者として、発起人、執筆者、会友、寄附者、販売代理人を取り上げ、その本籍、官職など判明するものを挙げて置く。⁴²

報中の役割	氏 名	出 身	官 職 (それに代る資格等)
発 起 人	葉 瀚	浙 江	生 員
〃	曾 広 銓	湖 南	知 府
〃	汪 康 年	浙 江	進 士
〃	汪 鍾 霖	江 蘇	
執 筆 者	葉 瀚	浙 江	生 員
〃	葉 燾 元	江 蘇	

会	友	晏	振	祐	江	蘇	奉賢訓導
"	"	伍	湛	忠	広	東	候補知県
"	"	姚	錫	光	江	蘇	補用府、候補知県
"	"	茅	謙	林	江	蘇	举人
"	"	陳	慶	林	江	蘇	附生
"	"	陳	桂	元	福	建	
"	"	王	朝	模	江	蘇	附生
"	"	王	昌	麟	浙	江	附生
"	"	鄒	振	清	安	徽	駐劄日本神戸兼大阪府正領事
"	"	吳	毓	庭	江	蘇	候選知州、安徽布政司經歷
"	"	李	經	鈺	安	徽	举人
"	"	桂	殿	華	安	徽	举人
寄附者	"	晏	振	祐	江	蘇	訓導
"	"	王	朝	模	江	蘇	附生
"	"	桂	殿	華	安	徽	举人
販売代理人	"	張		某			西学堂
"	"	周		某			関道署
"	"	翟	声	谷			時務報分館
"	"	陶		某			
"	"	吳		某			安慶藩經庁署
"	"	江	友	馥			
"	"	陳		某			
"	"	吳		某			
"	"	張		某			内閣
"	"	樓		某			

以上の参加者表を見ると、姓名の判明している参加者が延べで31名いることがわかる。その出身地を見れば、江蘇10名、浙江4名、安徽4名、湖南・広東・福建各1名であり、江蘇・浙江・安徽にかたよが見られる。

次に階層構成としては、知府（正4品）1名、知州（正5品）1名、知県（正6品）2名、訓導（従8品）2名、進士1名、正領事1名、举人4名、生員・附生6名、官吏（官職名不明）3名、西学堂勤務1名、官職不明5名である。

これから見ると、知府（正4品）を最高にして、举人・生員・附生の未入流者にかたよが見られる。

変法派内の派別としては、派別に入る有力者もないが、汪康年が、中間派かそれより右なので、全体として中間派かそれより右ではなかったかと思われる。

5 『蒙学报』の意義

『蒙学报』は、すでに述べたように、蒙学公会の機関紙として発行された。すなわち、幼児・児童の教育にあたる、教師や母親のための学报であり、子供の発達段階に応じて、教育できるよう、工夫がほどこされていた。

科举制下にあった清朝においては、ただ、四書五經の詰め込み教育が児童にほどこされたのであって、子供達の発達段階に応じた総合的な教育はなされなかった。

しかし本報においては、西欧風の教授法、学校論が明らかにされ、児童の発達段階に応じて、修身のみならず、国語・数学・理科・地理・歴史・絵画・家庭科の総合的なヨーロッパの近代風教育を加味した教育が意図され、実行されたところに、その啓蒙的な意義があると思われる。このように見ると、『蒙学报』は、変法運動に啓蒙的な役割を果たしただけでなく、中国近代の教育に先駆的役割を果たしていると考えられる。

しかし、この『蒙学报』も戊戌政変によって中断されたと推測される。

おわりに

以上、『蒙学报』について考察して来たが、最後に簡単にまとめておく。

『蒙学报』は、蒙学公会の機関誌であり、その発行の意図は、幼児・児童の教育にあたる教師と母親の啓蒙にあった。そのため名称も『蒙学报』とされた。また発行年月は、光緒23年(1897年)の11月頃であり、発行場所は、上海三馬路望平街口朝宗坊の蒙学報刊であった。

『蒙学报』の組織は、刊報凡例などにより知られるが、発起人・執筆者・会友・本館弁事人・販売代理人・寄附者が居り、販売取次所は、26の地域54ヶ所あり、報刊・役所・書店・学校・個人の家にかたよりが見られた。経済的には、報の売り上げや寄附に依存していたらしい。

内容としては、5歳から8歳用の上編と9歳から13歳用の下編に分れていたが、いずれも、文学・数学・理科・歴史・地理・絵画などが関するものが載せられ、また西欧風の教授法、学校論も述べられており、内容は平易になるよう努力されていた。報末には付録がつけられていた。

参加者は、延31人であり、その出身地は、江蘇・浙江・安徽にかたよりが見られ、その官職は、举人・生員・付生等、未入流の人達が多かった。

『蒙学报』の意義としては、それまでの中国には見られなかった、総合的・近代的な教育の雑誌であり、変法運動のみならず、中国の近代の教育にも啓蒙的な役割を果たしたと考えられる。

第五節 実学的教育の組織

従来、中国においては、科学のための儒学を中心とする学問が重要視され、実学的教育組織は軽んじられて来たが、変法時期になると、外国の圧迫をはねのけ、独立富強の国を作るために、実学が必要となり、国内においては、実学的教育組織が生まれ、海外に実学的なものを求め留学するケースも

見られるようになった。

国内における実学的教育組織としては、広くは、西学的なものの中に含まれるが、今それらを簡見すれば、学会としては、務農会、医学善会、化学会、測量学会などがあり、報刊としては、農学報、実学報、学堂としては、浙江杭州蚕学館、農学堂、実学堂などがあるが、ここでは、その一つの事例として、浙江杭州蚕学館を取り上げる。

第一項 浙江杭州蚕学館

はじめに

本節においては、変法運動における学堂の役割の一例として、実学的な教育組織である浙江杭州蚕学館を取り上げたい。^①

まず、その創設の経緯について考察し、ついで、その組織、内容、参加者について明らかにし、最後にその意義などについて見て行く。

1. 浙江杭州蚕学館の創設

浙江杭州蚕学館の創設については、農学報1の「蚕学将興」に次のように見えている。

さきに、寧波の税務司康発達は、中国の蚕業が日々に壊されるのを慨き、人に頼んで西欧に学んで、利害を求め、その方法をことごとく習得したら、たとえ与論で延ばされても、学が成って用いる所がなければ識者はこれを惜しむだろう。現に杭州の知府林迪臣は、蚕務学堂を創設することを擬り新法を教授しようとしている。この挙が成功すれば、将来蚕事は必ず盛んとなり、すくなくならざる利権が回復できる。^②

と述べられており、康発達の意見を入れた杭州知府の蚕務学堂の創設が成功すれば、かつての中国の利権が回復されるとしていることが知られる。

また、同様のことは、農学報41の浙江蚕学館表の「稟設原由」に次のように見える。

杭州府林迪臣太守は、光緒22年春、就任以来蚕絲業の衰旺を考求した。杭州の民間では近ごろ収穫があがらず、ついに康発達の蚕務条陳、「局を設け整頓するの意」を取り上げた。23年夏に巡撫に経費を発給して試弁するようお願いした。その大旨は、微粒子病を除き、佳種を製造し、飼育を精求し、学生に伝授して民間に広めることを第一の要義とした。また、海外の蚕業の盛んな方法の創始について、日々その成功を集める。だから日本人の教員を延聘して新法を教授させる。この蚕業は、つぶさに中・仏・日の三国の製する所を参考とする。^③

とあり、林迪臣が康発達の意見を入れ、巡撫に経費を出して貰い、佳い蚕種を学生によって広め、海外の良法も取り入れようとしていることが知られる。

また、同様のことは、杭州蚕学館招考章程第1条にも、「蚕学館の設置は蚕種を検査し、方法を判別して、蚕子を作ることを第1の要義とする^④」と述べられている。

また、杭州府林太守の養蚕学堂を創設するために経費を請うの文書によれば、

どうか、経費によって開弁して下さい。一方では、西洋に託して器械を購入し、一方では、地を
択って開局します。多少廻り道ですが、明年の新蚕は、まさによく事が及ぶでしょう。今中国と
日本の蚕絲の増減の数目を各々表にまとめました。学堂開設の大略章程を併わせ、別とじでご覧
いただき、調整をお願い申し上げます。仕事を行うことを指示していただければ、実に公便であ
ります。^⑤

とあり、器械の購入、地を選んで学堂を開学するための寄付を仰いでいることが知られる。

また農学报11に見られる「蚕師応聘」によれば、

杭州は、蚕学堂を創めることを擬り、目下、規模を略定した。現に寧波の江生金君に、教習と
なることを請うて招聘した。江君は、蚕の病いを看る法をパスツールに学んだ。また、かつて、
仏・伊・日本を遍歴し、種の飼育や繰絲の各術を察知し、皆極めて精究であり、すでに聘に応じ
て杭州に来ている。明春には開学する。^⑥

とあり、蚕学堂に寧波の江生金を招聘していることが知られる。

学校の建設については、『農学报』の「学堂興築」には、

杭州府では、蚕務学堂を創設すべく、明春の開設の準備をしている。現に屋舎を建造すること
を擬り、己に湖のほとりに土地を購入し、人夫をつのり、費用をみつもっている。林迪臣知府は、
特に秀才邵伯瓚にそれを監督する役目を命じているという。^⑦

とあり、すでに西湖のほとりに土地を購入し、知府林迪臣が秀才邵伯瓚に屋舎建造の監督を命じて
いることがわかる。

また、『農学报』41の浙江蚕学館表の館地に次のように見えている。

館地

杭州西湖金沙港に旧くから関帝祠祉があるので、今改めて建てた。^⑧

とあり、関帝廟の敷地に蚕学館が建てられたことが知られる。

また、浙江蚕学館表の館屋には、

館屋

館屋が基礎として占める土地は10畝で、前は、蚕種試験場、飼蚕所が1棟あり、上下14間であ
る。繭室は、1棟で5間あり、均しく、東洋・西洋の蚕房式に仿っている。後にある種樓の役所
は、1棟上下で20間あり、東西の校舍30間、桑葉貯蔵所は3間、食堂、厨房、門番の部屋共で12
間、均しく中国式に仿っている。

関帝祠祉6間を補建した。^⑨

とあり、蚕種試験場、校舍など、90近くの部屋があり、関帝廟も補修していることが知られる。

また、蚕学館創設の年代については、『農学报』26に

浙江蚕学館はすでに先月13日に開学した。^⑩

という記事が見られるので、光緒24年3月13日に開学されたことが知られる。

もっとも、浙江蚕学館表の開弁年月日では、3月11日になっている。^⑪

2 浙江杭州蚕学館の組織

養蚕学堂章程や浙江蚕学館招考章程などにより、浙江杭州蚕学館の組織について明らかにして行く。

まず、『農学報』10の「設立養蚕学堂章程」について見て行く。この章程は11条から成っているが、第1条、第2条には、

1. 学堂は、省域をもって主と為す。学生は、学成りて後、分けて儀器をもたせて、各県や嘉湖の各府に派遣し、養蚕公会を立てることを勧めさせ、推し広めさせる。

2. 教習は、或いは二人、或いは先ず、一人請う。必ず蚕学に精しく、外国の養蚕公院で免状を与えられた者を選んで充てるべきであり、これは最も大切なことであり、全体の關鍵となっている。^⑫

とあり、1条では、学堂の範囲が省内に限られ、卒業生を儀器をもたせて派遣させること、第2条では、教習は、外国のライセンスのある者を慎重に選ばうとしていたことが知られる。

第3条、第4条には、学生のことが触れられており、

1. 学生の年は20才前後で、総明、静細で文章のことに通じている者であり、試験で先ず、30名、或いは50名を採用し、存記して、班を抜き、堂に来て、学習する。学成れば、派出する。定員を残す所は随時、順次補充する。

1. 学生の課程は、須べからく教員の手によって定める。その大要は、1に、顕微鏡の使用法を習う。2に蚕の解剖学、3に蚕の生理学、4にバクテリアの病気を探し求める。5に蚕の病気の原因及び蚕の病気の防止法、6に養蚕の合理的方法。^⑬

とあり、第3条では、望ましい学生像、学生の採用数等が述べられており、第4条では6ヶ条に亘って、学生の教科課程が述べられており、顕微鏡の使用法から始まって、蚕の病気、養蚕の合理的方法まで習得することになっていたのがわかる。

また、教科目については、『農学報』41の「浙江蚕学館表」の教育大綱によれば、

1. 物理学大意

1. 化学大意

1. 植物学大意

1. 動物学大意

1. 気象学大意

1. 土壤論

1. 桑樹栽培論講義及実験

1. 蚕体生理

1. 蚕体病理

1. 蚕体解剖講義及実験

1. 蚕兒飼育法講義及実験

1. 繰絲法講義及実験

1. 顕微鏡講義及実験

1. 採種法講義及実験

1. 繭審査法講義及実験

1. 生絲審査法講義及実験

1. 害蟲論^⑭

とあり、17の教科目があったことが知られる。

第5条から第7条には、

1. 広く600倍の顕微鏡を購入する。経費をはかって、多ければ、多いほど良い。また、一切の儀器や各試薬を購入する。

1. まず、日本の蚕育図説を繙訳し、書が出来てから、広く印刷して傳播すべきである。

1. 中国の図学は久しく廃されている。外国で種々の蚕病を絵にしているのに仿って、印刷して本とし、検査するのに資とする。外国の最も重要な図学は、それぞれ、学校、工場等で、往々にして専門に絵事院を設立している。現在経費も充分でないが、只、できるだけ変通させて、用紙を購入し、洋法により、画を習い、印刷を学び、わずかでも描き出すようにすべきである。^⑮

とあり、第5条では顕微鏡や試薬の購入、第6条では、日本の蚕書図説の翻譯、第7条では、洋風の図学の普及について述べられている。

8条から10条にかけては養蚕の問題について述べられている。すなわち、

1. 中国の養蚕には、まだ糸を吐かないうちに病いでこはばるものがあり、或いは、こはばっていなくても棄てるべきものがある。貧民には、生産費を欠損して、破産する者が出る。これは病気によるものが半分で、天氣の暴寒、暴暖、炭火の過度によるものが半分である。今、外国のような繭房を造ることができないのなら、寒暑を表として基準とすべきである。日本のこの表は、値段も100文以下である。局で購入し、民間に話して、それぞれ購入させる。

1. 広く外国の蚕子紙を購入し、選種、配種の法をテストする。

1. 論帖を与えて、学生が蚕子紙を造って売ることを准す。また、蚕子紙をみだりに造ることを禁ずる。もとより、各国の法律を実施する。中国は、各地方の情形をよく調べる。抱泥できないとしても、但、風気を大いに開こうとしている。もし効果があれば、数家が同じく一緒に蚕を養い、桑を採る。かつては出す糸も少しかったが、今は、多く出すことができる。原価が安

ければ、養蚕はいよいよ多くなり、人々は争って新しいものを購入する。^⑩
とあり、蚕の病気、外国からの蚕子紙の購入、学生の蚕子製造による養蚕の発展が述べられている。

第11条には、

1. 学堂は、初めて創るので、房屋を修造し、外国の儀器も購入し、経費を多く用いる。その余は、月に分けて経費を出し、教員、学生を第1とし、まかない費、人夫の賃金をその次とし、その次は、訳書、刻書、印書、絵図の衍説であり、その次は、各国の蚕子紙と各薬品を購入することであり、最後に各郷、各鎮に学生を派遣し、費用を給付することである。今、経費36,000兩を請い、開局に当ってまず6,000兩を支出し、それ以後3年に亘って、毎年10,000兩を支出する。外国の養蚕学堂では、使用額は、計らない。中国は財政が大変なので、自ら力をあわせて節約せざるを得ない。公金をすこしでも無駄に与えて良心を失ってはならない。学堂中の計算された必需の経費で必要人員が節約できないものを除く、その余の一切の経費は、懇ごろに節約する。その事を総べる者は、自ら管理し、すこしも労や怨みを避けることをしない。ここにまず方法の大略を開除する。詳細章程は、はじまってから、随時決めて詳細を出す。^⑪

とあり、学堂創設のために要する経費として36,000兩が計上され、その内容としては、校舎、器具、教員、学生、職員の費用、書籍の発行、蚕子紙、薬品の購入、学生の派遣費用に当てられていること、開始後章程を改めることなどが知られる。

以上、「農学堂章程」について考察したが、次に「浙江蚕学館招考章程」について見て行く。この章程は、7条よりなり、学生の募集について述べられている。

第1条には、

1. 蚕学館の設置は、蚕種を検査し、方法を判別して、蚕子を作ることを第1の要義とする。実験が成功すれば、館中で蚕子紙を製成し、内地の養蚕家に販売する。その他、蚕種や桑を生育する方法もまた詳細に研究する。大旨は、康発達の成法を取り、中国の方法を参考にして、蚕病を救う。康氏の本は已に農学报内に分刊されている。^⑫

とあり、蚕学館の設置の意図が蚕子紙を製造し、農家に販売し養蚕の方法を研究することにあることが知られる。

第2条には、

1. 本館は、まず、杭州西湖の金沙港に屋舎を建て、器具を購入し、三年間試弁する。成功すれば、再び取り扱いを拡大する。^⑬

とあり、西湖の金沙港に校舎を建て、器具を購入しようとしていることが知られる。

第3条から、第7条にかけては、学生の問題について述べている。すなわち、

1. 人数を30名に定める。挙人、貢士、生員、童生を論じないで、家で、養蚕を世業としており、

文理に透徹して、年令が20才前後で、明敏、篤静な者は、受験を准す。文字は良く出来ても、養蚕の成育法について試問し、去留を定める。近眼の人は、顕微鏡には向かない。

1. 本館は、光緒24年の御用はじめの日よりはじめて、2月10日に止めることを定める。受験生の親が本館に赴いて、三代の年令、容貌、本籍を書き込む、紳士にしっかり保証して貰う。(省城外の郡は、皆自分で当地の紳士に請う。しかし、必ずしも官吏となった人でなくとも、貢挙された声望ある者なら保証者になれる) 2月11日を限って、一律に杭州に来て、本館が期を示して、試験をするのを待つ。

1. 在館の諸生は、必ず館中所定の課程規条を遵守し、心を尽くして学習する。別に詳細な条目がある。名前を告げて、来館して、面接を受ける。3年以内に、或いは館に留め、或いは郷鎮に派遣させる。必ず館中の調整に従わなければならない。勝手に辞退することはできない。違反者があれば保証人から館費を追徴する。期が満ちて後、学生には、得ることのできる利益がある。蚕子紙の類を製造販売する如きである。本館がよく調べて、許可書と印鑑を給付して証拠とする。

1. 学生は、月に按じて定例の休暇を4日与えられる。これは、蚕の作業がすでに始まっており、日中には、日班、夜には夜班があり、休暇の時は、随時決める。もし理由なく班に来ない場合や決められた休暇を違うことを請う者は、日に按じて月費を差し引く。館中に休暇を請う月日表を列挙する。すなわち、差し引いた所の経費は、勤奮者の奨金となる。この外疾病でなくて大故障ある者は、休暇を請うことはできない。均しく載せて、別に条目内に定める。

1. 館中、一間ごとに学生2名を住まわせる。一人ごとに一つのベットと机と二つの腰掛を備えている。この外、館への往來の旅費、布団、燈油など一切の用いなければならない物は各自で自ら備える。館中で各学生の食事を給付する外は、月に按じて雑費として洋銀三元を給する。²⁰⁾

とあり、学生の定員は30名、養蚕の成育法について試験をし、保証人が必要な事、在館生は所定の課程規則を遵守すること、在学期間は3年であること。卒業後は蚕子紙の販売ができること、学生は月に4日休みが与えられること、学生宿舍は、一部屋に二人入り、ベットなどが用意され、月三元の雑費が支給されることなどが知られる。

3. 浙江杭州蚕学館の内容

蚕学館の内容については、『農学报』26の「浙聘蚕師」に次のように見えている。

杭州蚕学館は、現に日本の駐杭州領事速水君により、代って農学士を招聘し、杭州蚕学館の教習に至っている。また通訳は、話を伝える仕事をしている。現に試験をして各生を入学させている。もうすこぶる蚕事を習うのに総明な者がおり、将来の成功は予想することができる。²¹⁾

とあり、日本から農学士が招聘され、学生も入学し、将来の成功が予想されていることが知られ

る。

蚕学館の成果については、『農学報』40に

蚕館成績

杭州蚕学館は、開設以来、春蚕を試養し、江生金君が主任となっている。昨年の当館の飼育の成績を示し、節録すれば以下の如くである。

館中で飼育している種は、イタリー、フランス、日本、中国の新昌、奉化、餘杭等の所である。各種は、皆佳いが、餘杭種は微粒子の毒を含むことが最も多い。3月26日より蟻を収める。日本種が最も先に孵化した。中国がこれに次いだ。伊、仏は最後であった。閏月の24日になって、蚕がまぶしに上り始めた。4月初3日繭680斤を採る。館中の蚕事は、民間に較べて10日先である。各所の繭は、中国種は、新昌、奉化が最も早く、余杭がこれを次いでいる。日本種は、銀白小石丸を改良した又昔が最も早く、松白黄金生綿室がこれに次いでいる。伊、仏の種繭は大きく厚い。

中日の種より過ぎてゐる。館中では、佳繭を選んで種を製造している。養蚕の種は、1,000余紙を計え、民間であらかじめ来て、購入を予約した者は、すでに500余紙である。²²⁾

とあり、蚕学館では、江生金を主任として、伊、仏、日本、中国の種を飼育しており、また春蚕の種1,000余紙を製造し、すでに500余紙が予約されていることが知られる。

4. 浙江杭州蚕学館の参加者

蚕学館の参加者について浙江蚕学館表などにより表示すれば別表の通りである。²³⁾

蚕学館中の役割	氏 名	貫 籍	官 職 (又はそれに代る資格等)
総 弁	林 迪 臣		杭州知府
教 習	轟 木 長	鹿 児 島	前宮城県農学校教諭
館 正	邵 伯 綱	浙 江	生 員
館 副	林 胎 珊	福 建	
“ “	陳 達 卿	福 建	
出洋学生監督	孫 實 甫		大阪華商
出 洋 学 生	嵯 侃	広 東	附 生
“ “	汪 有 齡	浙 江	“ “
主 任	江 生 金		
工 事 監 督	邵 伯 蘋	浙 江	生 員

また、『農学報』26によれば、学生が82名いたことが知られる。²⁴⁾ もっとも浙江杭州蚕学館表によれば、35名である。²⁵⁾

これから考えられることは、その出身地が判明している者は、7名であり、浙江3名、福建2名、

広東1名、日本1名であり、浙江と福建にかたよりが見られる。また学生はほとんどが浙江省の出身であろう。

また、官職は、知府（4品）1名、生員・附生（未入流）4名、華僑1名、日本人教諭1名であり、未入流の生員にかたよりが見られる。

変法派内の派別としては、不明であるが、知府の文章などから推察すれば中間より右であろう。

5. 浙江杭州蚕学館の意義

すでに見たように浙江杭州蚕学館は、中国の蚕業が日々壊されて行くので、寧波の税務司康発達が蚕務条陳を行い、それを受けて、杭州知府林迪臣によって創設されたものであった。

やがて、戊戌政変になると、変法期に設立された多くの学堂が閉鎖されたが、蚕学館は存続されることになった。すなわち、光緒25年3月に発行された『農学报』65の「蚕館記聞」によれば、

杭州蚕学館は、開館以後、成績が頗る顯著であり、現に学生の授業課目が日毎に増えたので、日本の前島次郎君を副教習に添聘しようとし、杭州の日本領事官に代りに聘することを請うたということである。²⁶⁾

とあり、いよいよ蚕学館が盛んとなり、日本人教習を招聘しようとしていることが知られる。

また、村田忠三郎氏が将来した光緒25年10月10日の気象観測表と蚕学館学生姓名表が残存していたことから蚕学館が存続していたことが知られる。²⁷⁾

以下、大清国浙江杭州省蚕学館学生姓名表を載せておく。

姓 名	号	歳 数	省 名	府 名	県 名	住 址
朱 敏	勉 行	27	浙 江	杭 州	仁 和	省城中運河河下文明樓間壁 同
陸 宝 泰	小 亭	28	同	同	同	
陸 鎮	頌 芹	22	同	同	同	
魏 汝 敬	簡 齋		同	同	同	
徐 昌 祖	桂 臣		同	同	同	貢院前 三墩鎮 省城中板兜巷
顧 鴻 章	子 泉		同	同	同	
傅 調 梅	和 羹	36	同	同	錢 塘	
吳 錫 璋	琢 甫	28	同	同	同	
黃 雙	杞 南	同	同	同		三墩鎮
徐 耀 彰	品 三		同	同	同	
余 仁	靜 波	19	同	同	同	
袁 毓 嵩	文 白		同	同	同	
楊 鴻 達	子 青		同	同	同	省城中三聖巷
邵 光 溶	舜 臣		同	同	同	
黃 明 經	子 臣	19	同	同		

邱仲剛	瀛洲	27	同	同		省城中貢院前
張文濬	勤生		同	同		
王維彬	子文		同	同		
俞品璋	雁題		同	同		
金劍梅	臣卿		同	同		
鄭愷梅	垂人		同	同		
王楷	士心		同	同		
羅志瀛	仲峙	28	同	同	海甯	州城東門外祝橋鎮
祝鼎	季梅	20	同	同	同	州城北門外居家街
居世昌	肇初	24	同	同	同	州城中錢家巷
沈鴻逵	讓井	27	同	同	同	州城北門外油車街
朱璜	翼舜	22	同	同	同	州城中放水橋
周承德	清吾	23	同	同	同	州城中雙仁巷
潘江	碩人		同	同	同	
錢鴻綬	仰山		同	紹興	山陰	
王休章	慕藏	21	同	同	新昌	縣城外溪西村
陳拌庚	吉甫		同	同	同	縣城中
呂汝本	湘浜		同	同	同	縣城新東門外真詔
俞鴻荃	琢章	22	同	同	同	縣城外溪西村
石如璧	慶華		同	同	同	
石鑑璞	藹生		同	同	同	
王士慎	价臣	30	同	同	諸暨	縣城外嶺口莊
陳之藩	幹材	32	同	同	同	同
陳輪	仲夫	28	同	同	同	縣城北門外十都淡鴻村
丁租訓	汀訂	24	同	同	同	
宣布澤	容實	21	同	同	同	縣城外十四都藏綠莊
周式穀	心翼	30	同	同	同	同
周之慎	紹甫		同	同	同	同
周銘劍	礪如		同	同	蕭山	
傅若金	雨樵		同	同	同	
孔昭潛	竺初		同	同	嵊縣	
朱秉樞	朗如		同	同		
王鍾殼	亦痒	21	同	金華	義烏	縣城外北鄉檀林鎮
駱繼郊	羽廷		同	同	同	
棲鶴升	吉卿		同	同	同	
洪疇	紫紋		同	同	同	
朱寶琛			同	同	同	

羅 嶸 梧 子 英	同	台 州	黃 嚴	
吳 林 翰 伯 西	同	同	同	
王 夢 弼 少 嚴	同	金 華	東 陽	
葉 成 芝 庭 香	同	處 州	麗 水	
趙 國 楨 周 臣	19	衢 州	西 安	府縣城中太白井
趙 煥 文 幼 波	20	同	同	同
章 華 國 仰 山		湖 州	德 清	
沈 錫 爵 輔 廷		同	同	
徐 世 熊 衡 伯		同	婦 安	
林 志 曾 魯 生		福 建	侯 官	
林 解 肖 泉		同	同	
蕭 良 子 易		同	同	
高 种 子 來	18	同	同	
林 景 源 叔 孫	18	同	同	省城北門后街
李 文 彬		同		
郭 延 輝 星 榆	20	同	閩 泉	浙江甯波府城中東勝街
蔡 觀 子 遠	26	同	同	
鄭 則 楠 珂	19	同	同	省城中水部
林 齋 珪		同	同	
楊 廷 勲		同		
鄭 起 潛		同		
蔡 熙		同		
陳 兆 清 耀 波	19	同	長 樂	縣城東門
劉 宝 圭 禹 卿	20	同	建 甯	
黃 春 錦		広 東		
雷 熙 澤 仲 英		安 徽	徽 州	懷 甯
雷 熙 彬 小 卿		同	同	同
張 承 啓 派 潢		湖 南		
李 明 榮 旭 光		四 川		
李 有 銘 右 卿		江 西		
顧 本 仁 孝 先		江 蘇	常 州	無 錫
王 壽 杓 道 平		同	同	同
黃 安 農 澄		同		
褚 繼 潤 幼 臣		同		

この表からまずわかることは、在學生は86名であり、年齢の判明している者は33名であり、10代が7名、20代が22名、30代が4名であるということである。

また、その出身省は、当然の事ながら浙江省にかたよりが見られ、61名が浙江省出身で、そのうち杭州府出身者は、20名である。

浙江省について多いのは、福建省の15名、江蘇省4名、安徽省の2名であり、1名見られるのは、広東、湖南、四川、江西である。

以上を通して蚕学館の意義として考えられることは、浙江杭州蚕学館の創設によって、杭州は勿論のこと、浙江省や福建省、江蘇省の蚕業が盛んとなり、これら諸省の経済をうるおし、ひいては、中国の富強に一定程度の役割を果たしたのではないかということである。

おわりに

最後に今まで述べた事をまとめておく。まず、その創設の経緯を考えれば、その意図として中国の蚕業を回復させ、利権を収めるため蚕学館を創設し、新法を教授しようとしていたことが知られる。そのため、経費依頼書の発行、教員招聘計画がなされ、学堂の興築も意図されていた。

ついで、蚕学館の組織としては、蚕学館章程が作られ、教員2人、学生は一年に20名内外を入学させ、費用としては、36,000千両を用意するなど、11条にわたる規則がつくられていた。また、7条にわたる学生募集規則も作られた。その内容としては、学生の定員、入学資格、学生生活、卒業後の仕事などに触れられている。

蚕学館の内容としては、教員を招聘し、学生達に蚕学館が、蚕の種を種つけして民間に配分している。蚕学館の参加者としては、総弁として杭州知府（4品）林迪臣や日本人教員として轟木長やその他の職員が5人おり、学生は82人いたことが知られ、派別は中間派より右であろう。

蚕学館の意義としては、浙江省の蚕学の発展に役立ったと考えられる。その後の展望としては、農学报、大清国浙江杭州蚕学館学生姓名表によれば、光緒25年になっても蚕学館は、廃止されず、86名の名前と気象観測が残されている。以上からも蚕学館は、杭州や浙江、福建などの蚕業の発展に寄与し、中国の富強に一定の役割を果たしたと考えられる。

第六節 中学的西学的教育の組織

中国では、科学のための準備の業として、書院などにおいて、儒学が重要視されて来たが、変法期に入ると、書院なども新しい傾向を帯びようになり、中学的なものに、西学的なものを加えた教育組織が生れるようになった。

今、それらの教育組織をあげて見れば、学会としては、すでに学会の所で見たように、聖学会、味経学会、校経学会、致用学会、明達学会など8以上があり、報刊としては、質学报、学堂としては、湖南致用学堂などがある。

本節では、その一例として、聖学会を取り上げる。

第一項 聖学会

はじめに

変法運動における学会の役割の最後の事例として今回は、聖学会を取り上げる。

聖学会は、儒学の学習とあわせて、ヨーロッパの近代科学も学ぼうとした、中学的西学的な学問的学会の一つである。

いま、そのあらましについて、まず聖学会の設置の意図と目的、機能、参加者等を考察し、最後に、聖学会の意義にも触れて見たい。

1、聖学会の設置

蔡希邠の「聖学会序」によれば、

……かつて、北京の士大夫が強学書局を開き、人材が集まった。この事はそのまま皇帝の聞かれる所となり、皇帝は悦ばれて、官局にして、大臣に管領させ、年に大金を出された。これは盛挙というべきである。最近広西省の士大夫が、同じように善き証人であり学に志す仕事をした八達、司馬光、王守仁、羅洪先の余風をおこし、大いに図書を陳列し、広く学会を開き、孔門の六教を伝えることをこいねがっている。……^①

とあり、北京の強学会に習って、広西省の士大夫が図書を陳列し学会を開こうとしている様子が知られる。

また、「兩粵広仁善堂聖学会縁起」によれば、

……宋、明の儒者は、一学を講ずる毎に、皆大会で交わった。今欧米もまたその通りである。会中に書籍の備えられないことはなく、器具のたくわえられないことはない。だから僻地に住んでいたり、離れて住んでいても書籍を購入し、新聞を見ることができ、それで切磋琢磨し、士は、才智と学業を有し、教えは日に昌んとなり、国は聖教をふみ、勢いは盛んとなる。今本堂がこの会を創設するのは、大むね古えの学校の規則と各家専門の法にならい、見聞を拡げ、風気を開き、上は先聖孔子の教えを拡め、中は国家有用の才を成し、下は一般民の愚でせまい習慣を聞いて法仁の義を失わないことを願っているということである。^②

とあり、兩粵広仁善堂に学会を開くことによって、見聞を拡め、風気を聞き、国家有用の人材を創出しようとしていることが知られる。

ついで、知新報第18冊の「聖学会開」によれば、

広西省で、最近風気が大いに開けたのは、同省の大官、候補人員、城中の士紳が、喜んで提唱したことによるものであり、一切の善挙が次第に興こされている。現に大官が、經古書院に算学時務の課を添設しており、また省中の広仁善堂には、聖学会を開設した。……

この会は、孔教を尊び中国を救うことを主旨としている。……

3月7日を定めて、開会し、按察使以下府県の官吏、候補人員、城中の士紳が皆会場に集って、孔子を崇祀し、鼓楽行礼した。一時に盛んを極め、中国第一の美挙である。……^③とあり、広西省の大官以下が光緒23年3月7日に会を開いている様子が伺われる。

以上、聖学会の意図、目的、設置場所、設立年代について述べたが、つぎに、機能について見て行く。

2、聖学会の機能

聖学会の機能については、すでに王爾敏氏が箇条書きにしておられるが、今史料に沿ってまとめて行く。^④

まず両粵広仁善堂聖学会縁起附会章によれば第一に庚子拜経が述べられている。すなわち、

本善堂は、壬辰の年、庚子拜経の会を持った。……それ、中国の義理學術の大道は、皆孔子から出ており、すべて血気があり、親を尊ばないことはない。外国は自らその宗教を尊んで、その教理に従って7日毎に1回礼拝を行っている。……

今よろしく大いにその規則（庚子拜経の会）を復活し、庚子の日に逢う毎に大会をすべきである。……

こうして聖教を維持し、人心を正し、萌え出させよう。^⑤とあり、庚子の日に拝教し儒教を維持しようとしたことが知られる。

第二に広く書器を購入することが述べられている。すなわち、

……善堂のある所は、要衝であり、集り易く、広く図書を購入して会購するのに便利である。……

今、中国の図書も合わせて購入するに当って、まず、経世有用の書を探し、西人の政学、各種の学問的な図書を購入し、考鏡を広め、研究に備えたい。……

また、天球、地球、望遠鏡、顕微鏡、測量学芸の新しい器具を購入し、皆に見せ、収め、知識を高める助けとしたい。^⑥

とあり、図書や器具の購入を通して、知識の向上を考えている。

第三に、報紙の刊布について

……桂林は、僻遠の地であり、新聞社もない。どうして、耳目を開いて識見を増すことができるか。……^⑦

と述べられており、新聞の発行の必要性が訴えられている。これに対し、前述の『知新報』では、新聞を発行した様子が見えている。すなわち、

……また聖学会では、まず、新聞社を開くことを相談し、名づけて広仁報といい、2日に1回出すことにし、唐巡撫がこのために縁起を書いて、すでに昨日、新聞に載せた。^⑧

とあり、『広仁報』を発行している様子がわかる。

第四に大義塾を設けることについて、

……桂林の城郷では、貧しい家の者がはなはだ多い。成人に達すると多くの英才がでるが、財力がなくて師についたので、困って学問をやめ道を究めることができない。そこで大義塾を設け、特に学者を招いて成人した士を育てたい。学科は經学を本とし義理、經濟、詞章、歐米の各学問に及ぶ。日に課程があり、月に考校があり、年に甄別がある。

……高才特出の士があれば面倒を見て優遇する。……^⑨

とあり、大義塾を設け、人材の育成を考えていることが知られる。

第五に三業学（農工商学）を聞くことについて述べられている。すなわち、

……歐米の富は、砲械軍兵を治めることにあるのではなく、土農工商に務めるのにある。農工商の業は、みな専門の書千百種を有しており、小学読本、幼学階梯、高等学校、皆、科を分けて教えている。また皆、会をもって格知の新学や、新器を講じ、農工商を業とする者に研究させ、そのため農工商業に従事する者は、皆、植物の理を知り、製造の法に通じ、万国万貨の源を解いている。

……今、これらの書を翻訳し、立学講求し、民智を開こうとするものである。^⑩

とあり、農工商の学を行って民智を開こうとしている様子が伺われる。

最後に今までの5つの事を総括して、

右五条は、まず桂林で始める。本善堂は、広州、梧州に分局をもって、次々に仕事を行い、資金の多い少いを見て、次第に各府州県に拡げて行く。……

講堂を創り、孔教を伝え、学校を建て、人材を育成し、巡回して土地、風俗、鉅務をしらべ、養貧院を設け、乞食を收容し、工芸を教える事などは、資金の多い所を見て、そこで行くべきであり、仁人志士が力を合わせてこれをしてくれるように望む。^⑪

とあり、各地に学会を広め、学校を建て、養貧院を設け、職業を身につけさせようとしていたことがわかる。

つぎに広仁善堂聖学会章程により、さらに聖学会の機能を見て行く。なお同章程は、18条より成っている。

まず第1条から第3条までは来会者について述べられている。すなわち、来会者は姓名爵里を善堂に郵便で知らせることになっており、来会者は、各位学業を論ぜず、お互いに切磋琢磨することが述べられている。また集る人達の声気が相通ずることも求められている。^⑫

第4条から第5条にかけては、研究内容について述べられているが、それによれば、孔子の經学を本として、中国史学からはじまって歴代制度、各種考摺、各種詞章、各省政俗の利弊、万国史学、万国公法、万国律例、万国政教の理法、古今万国語言文字、天文、比重、光声、物理、性理、生物、地質、医薬、金石、動植物、氣力、治術、師範、測量、書画、文字、減筆、農務、牧畜、商務、機械製

造、汽船や鉄道の建設と営業、電線や電気器具の製造、礦学、海軍や陸軍の学にまで及んでいる。また、学問上の質問なども許している。^⑬

第6条から第9条までは、捐助金の事などが述べられており、来会者は最低2両以上の捐助金が必要されている。また捐助金を多く出した者にはその額により、一定の期間を決めて報を送ることにしており、その帳簿の整理も述べられている。^⑭

その具体的な例としては、康有為自編年譜に

……唐薇卿、岑雲階と議して聖学会を開いた。史淳之は善後局の万金を出し、遊子袋布政使は千金を捐じた。……^⑮

とある。

第10条から第13条にかけては、役員について述べられており、役員としては、総理、値理、会弁、坐弁、董事、商董兼司帳が置かれていたことが知られる。^⑯

第14条から第17条にかけては、経理や給料の事が述べられている。すなわち、第14条では、資金が多くなったら預金し利息を得ることを考えている。また第15条では、給料の事について触れられており、総理、値理、董事は、義によって、聖学会を始めたのだから、給料を貰わず、実務担当者として働いた人達の給料を考えている。第16条では、費用の儉約を求めており、第17条では、帳簿の記帳について述べている。^⑰

最後に第18条では章程の改正などについて述べられており、最初に簡明章程を作り、ついで詳細章程を作ろうとしていたことなどが知られる。^⑱

以上、会章、章程などにより、聖学会の機能を明らかにしたが、つぎに、参加者について明らかにして行く。

3、聖学会の参加者

まず、史料により参加者表を作成する。

氏 名	出 身	官職 (又はそれに代る階級)
唐 景 崧	広 西	台湾巡撫
岑 春 煊	広 西	候補知府
康 有 為	広 東	工部主事
蔡 希 邵		広西按察使
向 万 鏞		広西道員
史 念 祖	江 蘇	広西巡撫
游 知 開	湖 南	広西布政使

聖学会の参加者でその名が判明しているものは、唐景崧、岑春煊、康有為、蔡希邠、向万鏞、史念祖、遊智開であり、その他にこれらの人達に指導されて参加した多くの官紳があると思われる。

ちなみに唐景崧は、近代名人小伝によれば、桂林の人であり、進士に合格して吏部主事となり、張之洞の推薦によって、台湾の巡撫になった人である。¹⁹ 岑春煊は、この頃候補知府であり、後に巡撫、総督、大臣になった人である。²⁰

史念祖は軍功によって官につき巡撫となった。²¹ 遊智開は、成豊元年の挙人であり、すでに巡撫、総督を歴任している。²²

これらの参加者の階層構成を見れば、巡撫（2品）2名、布政使（2品）1名、按察使（従2品）1名、道員（4品）1名、候補知府（4品）1名、工部主事（6品）1名であり、広西省の上層部によって構成されていることがわかる。

また、派別としては、康梁系と広西省の大官と郷紳からなっており、中間派より右であったのではないと思われる。

つぎに出身地は、広西2名、広東1名、江蘇1名、湖南1名、不明2名であり、広西の土着の人が多くなっている。

4、聖学会の意義

すでに見たように、聖学会は、広西省の風気を開くものであり、その意図は、孔教をもって中国を救うことにありといわれているが実体としては、中学と西学を合わせ学ぶ、中学的西学的学問の学会であり、広西省の近代化に一定の役割を果たしたと考えられ、ここに聖学会の意義があると考えられる。

また、参加者が、広西巡撫以下の官吏と郷紳が主であったことから、その性格は、半官半民の形を取っていた。この点は、湖南省にこのあと設立された南学会と似ている。

おわりに

最後に、いままで述べて来たことをまとめれば、聖学会は、広西省の近代化のために、光緒24年3月に広西省桂林の広仁善堂に設立され、各府州県に分局を拡大して行くことが意図されていた。

その機能としては、儒教を維持し、図書や器具を購入し、報刊を発行し、義塾や、農工商のための学校の設立による人材の育成をはかった。そのため、中学ならびに西学を講義したのであった。

また章程には、来会者、捐助金、役員、経理の事などが明らかにされている。

聖学会の参加者は、広西省の巡撫以下の官吏と郷紳からなっており、半官半民に近い形を取っていた。

聖学会の意義としては、中学的西学的学問の学会であり、広西省の近代化に一定の役割を果たしたと考えられる。

第7節 ま と め

第二章においては、教育・学問的組織としての学会、報館、学堂について述べた。

第一節においては、全体的な概観を行い、第二節においては、西学を受容と題して、変法期の学会としては、務農会を取り上げ、報館としては、『農学报』、『格致新報』を、学堂としては、湖南時務学堂、京師大学堂を取り上げた。今、そのあらましをまとめて置く。

第一項は、務農会を取り上げた。務農会は、光緒22年(1896年)に上海に創設されたものであり、その意図は、西欧風の近代的農業法を中国に導入し、中国を富強の国にしようとするものであった。機能としては、農学書等の翻訳、『農学报』の発行、外人教師の招聘を通して中国の知識人達に近代的農学を教えようとするものであった。そのため農具等の購入、動植物の飼育、栽培方法の研究、蚕種試験場、製糖、酒造工場、農学堂の設立、博覧会の開設等を考えていた。

務農会の参加者は、中下級の官僚層であり、出身地は、江蘇省にかたよりが見られた。

第二項は『農学报』を取り上げた。『農学报』は、近代的な農業、蚕桑、畜牧を開発するため、1897年4月に上海、新馬路の梅福里で発行された。

最初月2回発行されたが、光緒25年から旬刊になった。

年間の費用は、4、5千元にとどめ、寄附者には『農学报』を無料で送り、本代は、1冊1角5分、年間には3元であった。

『農学报』の参加者としては、羅振玉、梁啓超、張謇、汪康年等、36名の名前が判明しており、出身地は、浙江、江蘇にかたよりが見られ、官職では、通判(正6品)を最高として附生、知県、未入流者にかたよりが見られた。

変法派内の派別としては、中間派から右よりになる。

『農学报』の戊戌政変までの45冊の内容としては、項目として、奏摺、本会事状、東報があり、主なものとしては、日本茶、米国綿花、インド・セイロン茶の隆盛、英国農機具の輸出、日本の稲の害虫、中国、インド・セイロン茶の輸出入の比較がある。

『農学报』の意義としては、近代的な、農業、蚕桑、茶、家畜の開発、虫の問題の解決にあずかって力があり、これらの変法期に呼応して地方社会を啓蒙するものであった同報は、政変後も中国の農業の近代化に影響を与えたと考えられる。

第三項の『格致新報』は、1898年3月、上海の新北門外天主堂街29号の格致新報館で第1号が創刊された。

同報は、人材養成のための学問報として、その発行が意図されたのであった。同報は、通年で4元、1冊、1角3分であり、有益な書物を載せ、学会を作り、実験をしようとしていたことが知られる。また販売所は、65ヶ所あった。

内容としては、論文が36載せられており、翻訳された主な外国誌は、13以上ある。内容を取り上げた論文は「動物学」、「論水」、「論金木土」である。

同報の参加者は、集処人が45名、寄稿者が17名おり、出身地としては、江蘇省にかたよりが見られ、一品を最高とする官僚、キリスト教関係者にかたよりが見られた。

意義としては、同報が記事と実験を通して、中国人に科学的基礎知識を教育する先駆的な役割を果たしている。

第四項では、時務学堂について考察した。時務学堂は、光緒23年（1897年）湖南省に設立されたものであり、中学を基本に洋学を学ばせ、京師大学堂等で、研究させたり、官吏にし、民智を広めるためのものであった。

機能としては、修学年限は5年であり、学科目は中学と西学であり、上級生になると専門に分けた。また、試験の方法、学習方法も考えられていた。学堂内では民権論が唱えられていた。

参加者としては、教員と学生がいるが、中下級の官僚と未入流が多い。派別は、開学申請者は、右派、学堂指導者は、中間派と左派、学生達は、左派であった。その意義は、湖南省に、近代的民権的な教育で官吏を養成しようとしたところにあり、一期生には国事に殉じている者が多い。

第五項では、京師大学堂を取り上げた。まず、京師大学堂の創立は、光緒24年（1897年）、北京であった。この学堂は、国子監の制度、書院、同文館を継承発展させたものであり、孫家鼎が、管学大臣、W・A・P・マーティンが総教習となった。

その意図は、各省を統轄し、世界からよく抑がれる学堂となり、人材を養成するためであった。ついで機能について考察したが、授業内容としては、普通学と外国語と専門科目があり、学生は普通課程を終ってから専門課程に入った。附属施設としては、図書館、博物館、小学堂、建築学堂、医学堂等があった。経費としては、開設費用35万両、年間経常費としては18万両が計上された。

ついでその組織について考察したが、教官は41名、事務官41名計82名であった。教官は、中国人で欧米の事に通じている者を採用し総教習が責任を持った。学生は、大官の子弟と中学堂卒業生の2種類があった。学生定員は500名であったが、成績順に手当金に差をつけて支給した。

ついでその意義について考察したが、国家がその卒業生を官吏に採用したり、海外に遊学させたり、教習の効果をあげている者を優遇しているので、京師大学堂に期待していたことが知られる。

最後にその後の展望をしたが、京師大学堂が開始されるのは、光緒32年（1906年）であり、時代の変遷の度ごとにそのあり方が注目されている。

第三節では中国女学堂を取り上げた。

女学堂の設置は1898年6月であり、その意図は、儒教を遵守する女子教育を行い、富国強兵策の一環としてしていることが知られる。

ついで、女学堂の機能としては、教習など主なものは女性を用い、男子は室内に入れないことになっていた。また、学生は最初定員40名であり、年令としては、8才以上15才までであり、纏足をしない

良家の子女を年令に応じた学力により入学させようとしていたことが知られる。

教科内容としては、識字、文法、啓蒙書と史学、芸術、治法、性理等の専門書を読ませていたことが知られる。

専門の学科としては、算学、医学、法学の3学科と師範科の4つが置かれた。また婦人に必要な紡織、絵画等も教授された。

学堂は、上海の南桂墅里に設けられたので寄宿舎が準備され、僕婦が備われ、学費は毎月、銀1元であった。

卒業生には、卒業証書を与え、女権を自覚させ、医者、法律家、教員や、良妻賢母の育成を意図した。

つきに参加者について見て行けば、参加者としては、道員以下の康梁派の中下級の官僚と捐官の経元善を中必とする上海商人層が多く、康梁系の広東と経元善等が出た浙江にかたよりが見られた。

寄附者について見て行けば、寄附者は女性であり、その完全な氏名も残されていないが、関係者の官職を見れば、道員、知県、翰林院編修の中下級官僚にかたよりが見られ、この中には康梁系と上海商人層が見られる。また出身地は、女学堂の設立された、江蘇と上海商人層の出身地浙江、康梁系の広東にかたよりが見られ、参加者と同じ傾向が見られる。

最後に女学堂の意義としては、女性の権利を自覚させ、医師、法律家、教師、良妻賢母の育成を意図した所にあり、限界としては、儒教にしばられていた。

以上が女学堂のあらましであるが、戊戌政変により、女学堂が僅か2年足らずで閉鎖の己むなきに至ったとしても、その存在意義は決して小さくないといわなければならないだろう。

第四節では、第一項で蒙学会を取り上げた。蒙学会は、光緒23年（1897年）、教育者養成を目的に上海に設立された、西学的な学会であった。

機能としては、集会、『蒙学報』や図書の発行、学校設立による人材育成が考えられていた。参加者としては、中下級の官僚が多く、出身地としては浙江にかたよりがあった。学会の意義としては、教育者養成による人材の育成が考えられる。

ついで、第二項の『蒙学報』についてまとめて行けば、『蒙学報』は、蒙学会の機関誌であり、その発行の意図は、幼児・児童の教育にあたる教師と母親の啓蒙にあった。そのため名称も『蒙学報』とされた。また発行年月は、光緒23年（1897）の11月頃であり、発行場所は、上海三馬路望平街口朝宗坊の蒙学報館であった。

『蒙学報』の組織は、発起人・執筆者・会友本館弁事人・販売代理人・寄附者が居り、販売取次所は、26の地域54ヶ所あった。経済的には、報の売り上げや寄附に依存していたらしい。

内容としては、5歳から8歳用の上編と9歳から13歳用の下編に分れていたが、いずれも、文学・数学・理科・歴史・地理・絵画などに関するものが載せられ、また西欧風の教授法、学校論も述べられており、内容は平易になるよう努力されていた。報末には付録がつけられていた。

参加者は、延31人であり、その出身地は、江蘇、浙江、安徽にかたよりが見られ、その官職は、挙人・生員・付生等、未入流の人達が多かった。

『蒙学报』の意義としては、それまでの中国には見られなかった、総合的・近代的な教育の雑誌であり、変法運動のみならず、中国の近代の教育にも啓蒙的な役割を果たしたと考えられる。

第五節では、浙江杭州蚕学館を取り上げた。

浙江杭州蚕学館は光緒24年3月に開設されたが、その創設の経緯を考えれば、その意図として中国の蚕業を回復させ、利権を収めるため蚕学館を創設し、新法を教授しようとしていたことが知られる。そのため、経費依頼書の発行、教員招聘計画がなされ、学堂の興築も意図されていた。

ついで、蚕学館の組織としては、蚕学館章程が作られ、教員2人、学生は一年に20名内外を入学させ、費用としては、36,000千兩を用意するなど、11条にわたる規則がつくられていた。また、7条にわたる学生募集規則も作られた。その内容としては、学生の定員、入学資格、学生生活、卒業後の仕事などに触れられている。

蚕学館の内容としては、教員を招聘し、学生達に蚕学館が、蚕の種を種つけして民間に配分している。蚕学館の参加者としては、総弁として杭州知府（4品）林迪臣や日本人教員として轟木長やその他の職員が5人おり、学生は82人いたことが知られ、派別は中間派より右であろう。

蚕学館の意義としては、浙江省の蚕学の発展に役立ったと考えられる。その後の展望としては、農学报、大清国浙江杭州蚕学館学生姓名表によれば、光緒25年になっても蚕学館は、廃止されず、86名の名前と気象観測が残されている。以上からも蚕学館は、杭州や浙江、福建などの蚕業の発展に寄与し、中国の富強に一定の役割を果たしたと考えられる。

第六節では聖学会を取り上げた。

聖学会は、広西省の近代化のために、光緒24年3月に広西省桂林の広仁善堂に設立され、各府州県に分局を拡大して行くことが意図されていた。

その機能としては、儒教を維持し、図書や器具を購入し、報刊を発行し、義塾や、農工商のための学校の設立による人材の育成をはかった。そのため、中学ならびに西学を講義したのであった。

また章程には、来会者、捐助金、役員、経理の事などが明らかにされている。

聖学会の参加者は、広西省の巡撫以下の官史と郷紳からなっており、半官半民に近い形を取っていた。

聖学会の意義としては、中学的西学的学会であり、広西省の近代化に一定の役割を果たしたと考えられる。